東京都江戸東京博物館研究報告　第2号　1997年3月
Journal of Edo-Tokyo Studies, NO.2, P. 1-44, March, 1997.

【論　文】

猿猴庵著『江戸循覧記』にみる江戸認識のあり方

鈴　木　章　生 *

目　次

はじめに
1．猿猴庵の江戸滞在
(1)　『江戸循覧記』の概要
(2)　猿猴庵の江戸出府
(3)　猿猴庵の帰国時期
2．『江戸循覧記』の性格
(1)　「画誌」の画面構成
(2)　記述構成のあり方
(3)　貸本『江戸循覧記』の景観年代
3．都市を見る視点
(1)　『江戸砂子』の影響
(2)　「江戸第一」主義
(3)　建造物への執着
(4)　日常生活へのまなざし
4．都市空間の把握
(1)　平面的空間把握
(2)　立体的空間（パースペクティヴ）把握
おわりに

キーワード　猿猴庵　尾張藩士　『江戸循覧記』　『江戸砂子』　「江戸第一」主義　建造物　日常生活　俯瞰図　線遠近法　都市空間　江戸認識

はじめに

高度経済成長以降、全国規模での地域開発と都市化の進展は自治体史刊行を活発化させたが、先のバブル崩壊とともにその動きもほぼ終息を迎えた観がある。私たちの生活を取り巻く地域や社会全体が激変したこの間は、さまざまな学問分野が生活の変化や地域認識のあり方に注目し、積極的に取り組んで来た時期でもあった。日本近世史でもこうした情勢を受けて、民衆や地域の側から歴史を解明しようとする動きが活発化し、日常生活の実態や社会の解明へと視点が移り、より問題の細分化、個別化が進んだといえる。[1]

とりわけ近年注目すべき点は、地域の特質や歴史を民衆の心意面にまで掘り下げて再認識しようとする研究である。封建制度としての町や村のあり方ばかりではなく、民衆がその地域でどのような生活や文化を営んできたのか、どのような心性の形成を築き上げ、それをどのよう

にして継承してきたのか、郷土やふるさとといったアイデンティティーをめぐる解明が近世の名所案内や地誌の編纂過程などに注目して多く見られるようになった。[2]

民衆の地域認識のあり方に注目する視点は、民衆の地域結合の解明の中にすでに認めることができる。その論点は、権力者側からの民衆統治のための手段なのか、民衆の主体的な地域の共有化なのか、といった二項対立的な関係構造にみる地域秩序や正当性のあり方を民衆の意識形成や運動として把握しようとするものであった。近年の問題はより具体的な民衆の空間認識のあり方や歴史意識のあり方、それがどのような人々にどのような機能を果たしているのかといった分析解明へと展開されている。[3]なかでも研究が進展しているのは名所記や由緒書を素材とした地域認識のあり方に着目したものである。公権力を背景に作成されるいわゆる官撰地誌や、名主や知識人らのつくる民間地誌がどのような経緯でつくられ、なぜ19世紀に増えてくるのか、官と民での差異は何か、都市と地方での差異は見られるのか等々、さまざまな分析視角をもって取り組まれているのが昨今である。

白井哲哉氏は、官撰地誌の編纂過程に注目して、幕府の地誌編纂の背景にある地域編成のあり方や民衆統治の観点を探ることで地誌に対する歴史的再評価を試みている。[4]羽賀祥二氏は、地誌にみる伝承的宗教的世界の記述が、知識人の考証を踏まえた学問的記述へと時代的に変化することに着目し、それらを歴史認識や地域認識の変化、さらには近代化論として捉えようとしている。[5]岩橋清美氏は、由緒や旧記に記されたムラの歴史を記述する行為、さらにはその内容を絵に描く制作過程において、作者の「郷土」意識の形成と展開について積極的に把握しようとしている。[6]

名所・旧跡などのある特定の空間や施設が絵画として描かれたり、文章として記述されたりするのは、その場所や施設そのものが何らかの歴史的な由緒を持つものと考える。同時にまたそれらは、人々の地域認識のあり方を示す表象[7]としても把握することができる。つまり、私たちはある特定の場所の存在や意味を、歌、絵画、地誌、名所案内、絵図などの作品を通じて一般化して共有できるということである。こうした名所・旧跡のいわば記号化は、当時の民衆の郷土意識や歴史意識を背景にして獲得され、人々のアイデンティティーの確立に大きく影響していたことは間違いない。

江戸の名所旧跡を扱った代表作として、歌川広重の「名所江戸百景」や町名主斎藤月岑らのまとめた『江戸名所図会』など、絵画史や出版文化史では著名な作品がある。形態・技法の差はあれども皆江戸の人間の立場で視覚化された名所絵であり、名所図会であった。従来、絵画史における形式様式論をはじめ、出版文化における位置づけなど、作品論で展開される傾向が強かった。本稿の目的は、当時の人間が江戸の名所をどのように把握・認識していたのかといった分析視点の確立とその解明にある。その場合、江戸以外の人間が江戸をどのように見ていたのかといった位相関係のなかで把握することも有効と考える。さらに、紀行文や随筆資料、絵画資料の歴史資料としての位置づけが低かったことも事実である。確かに、こうした資料素

材を通して事件や制度の解明といった歴史叙述は難しいが、都市の日常的・非日常的な慣行や行動の理解、都市の空間特性や場所性の把握、文化や象徴分析の素材として本格的に取り上げることも少なかった。

そこで本稿の課題はこれまでの研究成果を踏まえながら、名所案内や地誌を素材にして江戸という都市を人々がどのように捉えていたのか、この問題をあらたに江戸以外の人間の視点から明らかにしようとするものである。そのため一般化をめざすというより、作品として視覚化され、文字化された都市江戸を一人の人間の目を通じて読み込むことで、雑多な江戸に対する認識のあり方を理解したいと考える。[8)]

1．猿猴庵の江戸滞在

(1)　『江戸循覧記』の概要

名古屋を中心に執筆活動をした猿猴庵（えんこうあん）こと高力種信（こうりきたねのぶ）は、文政11年（1828）に江戸を題材とする名所案内『江戸循覧記』を編んだ。本稿はこの作品を主な素材として、猿猴庵が都市江戸をどのように捉えていたかを分析するものである。

三百石取りの尾張藩士であった高力猿猴庵（1756―1831）は、本名高力種信、猿猴庵・艶好と号した文化人であった。なかでも『猿猴庵日記』[9)]は、猿猴庵17歳の明和９年（1772）から文政11年（1828）の73歳までの日記で、途中15年程の欠落部分があるものの自筆本５冊と他に転写本45冊がこれまで伝えられている。

猿猴庵はその生涯で、日記の他に百以上に及ぶ著作を残している。その代表作として『尾張名陽図会』や『東街便覧図略』などがあげられるが、その多くは自筆の挿絵を入れた地誌類、祭礼・法会・開帳などの行事を描いた記録、生活風俗を書き留めた随筆などである。活動拠点は名古屋が中心で、城下の町の変遷や生活風俗を記した数多くの作品は貴重な歴史・生活資料として評価が高い。しかしながら、刊本となったものは少なく、その多くは貸本として流布し、独特な文化活動を繰り広げて来た人物であることが指摘されている。[10)]

分析資料として取り上げる『江戸循覧記』は財団法人東洋文庫に所蔵されているもので、縦25.6、幅18.5センチメートルの自筆着色本全３冊である（尚、図版は論文末にまとめて掲載したので適宜参照されたい）。表紙（図１）には卍の形を崩して連ねた紙表紙の紗綾型紋様が使われ、それぞれの冊子の左肩には、墨書で「猿猴莽　江戸循覧記　一」「猿猴菴　江戸循覧記　二」「猿猴莽　江戸循覧記　三止」と記された子持ち枠貼題簽があり、特徴ある装丁を施している。この表紙の紋様が大野屋こと「大惣」と称された貸本屋を示している。

貸本屋大惣の全貌は、いくつかの先行研究があるが、その蔵書については早稲田大学図書館所蔵の「大野屋惣兵衛蔵書目録」によってつぶさに知ることができる。[11)]この目録は、大惣主人の急逝によって廃業を余儀なくされた際に蔵書を売却した台帳とされ、明和４年（1767）と伝

える創業から明治31年（1898）まで蔵書２万冊以上に及ぶ。蔵書はまず形態によって分類され、次にいろは順の記号と番号が付与されている。この番号が、独特の表紙の貼題簽の脇に小片の蔵書票として添付されており、目録と照合できるようになっている。『江戸循覧記』の表紙にも小片の貼られた形跡が見られるが、蔵書票は剝がれている状態である。しかしながら、この本が大惣本であることは装丁からして間違いない。

猿猴庵が貸本屋として名声のあった大惣と深いかかわりを持っていたことは事実で、後半生には大惣からの依頼によって作られた作品もいくつかある。この『江戸循覧記』もまた、大惣からの依頼によってまとめられた可能性は否定できない。その制作時期は文政11年、猿猴庵73歳の作品である。しかし、江戸の内容を記した本書の情報源は、天明６年から寛政にかけて彼が江戸に滞在した時期とされている。それは『猿猴庵日記』の欠落部分とちょうど時期的に重なる部分でもあり、その間の状況や行動を確認する数少ない資料としても無視できない作品である。

それにしても天明６年からの江戸滞在によって得た名所や風俗などの情報を、猿猴庵が73歳の時に浄書したというのはとても不自然である。草稿本があって、後に何らかのきっかけで浄書したとすれば、そこに大惣の依頼があったとするのが自然であるが、草稿の存在は現在のところ認められず、詳細なことははっきりしない。ここでは概略だけにとどめて、詳細な検討は以下に続けることとするが、制作時期と江戸滞在時期のズレを念頭に置きながら、都市としての江戸を猿猴庵がどのような視座で捉えていたのか、記述の内容構成から分析することとしたい。

(2)　猿猴庵の江戸出府

昭和61年（1986）11月からおよそ１ヵ月半の間、名古屋市博物館の部門展として「猿猴庵とその時代」と題する展覧会が開催された[12]。名古屋市博物館の展示は、猿猴庵の著作を一堂に会して紹介するとともに、個々に記述された言語や絵画表現を通して、都市文化や都市の人々の行動を理解する作品として捉えようとする姿勢が窺われる。まさに展示の副題に「尾張藩士の描いた名古屋」とあったように、単なる文芸作品としてではなく地域資料として位置づける展覧会の姿勢や取り組み方は、都市論や新たな史料論を展開する方法としてきわめて示唆に富んだものがあった。

すでに紹介され知られていることではあるが、猿猴庵の事跡で特に重要と思われる事柄をここで整理しておくことにする。

尾張藩士の出仕について藩士個々の記録を集成した「藩士名寄[13]」によると、猿猴庵は高力新蔵として次のように記述されている。

一　天明五巳年十二月二十八日、御目見より父与左衛門知行三百石無相違被下置、御馬廻組。

一　寛政四子十二月晦日、大御番組被仰付。

一　文化四卯八月九日、願之通、大御番組御免、御馬廻組被仰付。

一　天保二卯七月十二日、病死。

猿猴庵の生没は、日記が始まる明和９年（1772）の17歳から起算すると宝暦６年（1756）の生まれで、天保２年（1831）76歳で病死する。[14] 天明５年（1785）の30歳の時、父種篤こと与左衛門の三百石を継いで馬廻組の任についている。さらに寛政４年（1792）12月晦日から文化４年（1807）８月９日まで、年令でいうと37歳から52歳まで大番組を勤め、後再び馬廻組になり天保２年７月に亡くなる。

その他に猿猴庵の事跡を確認するには「猿猴庵日記」が存在するが、本稿との関連で問題なのは日記が途中欠如する天明６年の31歳から寛政12年の45歳までの間がどうであったかである。先の名古屋市博物館の展覧会でもこの間の事柄について詳細なことはわかっていない。猿猴庵自身の研究でもこの空白の時間が停滞を招いている。ところが、本稿で分析する『江戸循覧記』の冒頭部分の日本橋の書き出しには次のような記述があり、天明６年（1786）の冬に猿猴庵がすでに江戸にいたことを窺わせる。

天明丙午の冬、予東都に趣たる日、我旅店において夢見らく

つまり、この年代は日記の欠落部分とちょうど重なることとなり、空白を埋めるひとつの材料を提供していることになる。

さらには、猿猴庵が天明６年に江戸にいたであろうことを知る傍証資料として、熱田から品川まで200図を収録した絵入りの名所案内『東街便覧図略』[15] の凡例に注目してみたい。

一、此図は、去ぬる丙午の暮秋、東行の日、旅中の随筆にして、我尾の熱田より江都の品川に至るの間、道すがら目に遮る所の名跡・勝地・産物等ありのまゝに写し留しを、同志の観ともならんとかと風流の画本となし、東街便覧図略と号して六の巻となれり。

ここにみる「丙午」は天明６年で、季節的には「暮秋」となり、この時期に名古屋から江戸へ向かい、さまざまな名跡・勝地・産物等を記していったことが理解できる。[16]

ところで猿猴庵がなぜ江戸へ赴いたのか、はっきりしたことは明らかにはできないが、その目的や理由に触れておきたい。先記した「藩士名寄」にみたように、彼の役向きが馬廻組ということから参勤交代にからむ藩主随行がまず想定される。そこで天明５年から６年にかけての尾張徳川家９代目藩主徳川宗睦の出府動向をみると、『徳川実紀』では天明５年３月19日に臨時の朝会があり、「尾張大納言宗睦卿のもとに牧野越中守貞長御使して就封の暇仰下され」、藩主宗睦は江戸から名古屋へ帰国する承諾を得ている。[17] また、徳川宗睦の事跡を書き出した「御日記頭書」によれば、宗睦は「同五巳三月廿八日江戸御立名古屋へ御登」[18] となっており、天明５年３月末に江戸を離れ、名古屋へ向けて立っていることが確認できる。

さらに『徳川実紀』によれば、宗睦は天明６年３月19日に江戸へ出府し、「此日尾張大納言宗睦卿府に入られしかば、牧野越中守貞長御使して慰労」を受け、同月21日に臨時朝会によって

「尾張大納言宗睦卿参観の拝謁」がなされ、同月23日には「尾張宰相治行卿のもとに、松平周防守康福御使して就封の御ゆるしあり。治行卿やがて出仕して謝せらる。これはじめての就封なれば」として宗睦と治行が入れ代わりに江戸と名古屋を行き来したことがわかる。[19] 歴代藩主の事跡を綴った「御日記頭書」で宗睦の動向を確認すると、「(天明6年・筆者註) 三月九日名古屋御立江戸へ御下向」という記事があるので、名古屋を9日に出発し、19日には江戸へ到着したことがわかる。[20]

したがって、天明5年3月に宗睦が江戸から名古屋へ、同6年3月に名古屋から江戸へと出府し、その直後に治行が名古屋へはじめて行くことが確認されたことで、猿猴庵が天明6年の秋から冬にかけて江戸にいた理由を考える時、藩主に随行したという理由は考え難いことになる。

それでは他にどのような理由が考えられるか、天明6年の大きな事件を考えておく必要がある。7月には江戸が大洪水に見舞われ被害甚大で、8月には老中田沼意次が罷免となり、9月8日に10代将軍家治が在職期間26年の50歳でこの世を去っている。[21] さらには江戸市ケ谷にある尾張藩上屋敷が11月11日に火災に遭っている等である。江戸表はもちろんであるが、尾張藩としても落ち着きのない激動の年であったことがわかる。特に「暮秋」「冬」という季節を考慮するならば、9月から10月にかけての時期、すなわち将軍死去に伴う何らかの関係、例えば家治の葬儀は「十月四日午の刻より霊柩を発引」しているので、それに関連して出府を命ぜられたことが濃厚である。しかし、猿猴庵と将軍の葬儀とを結び付ける関係史料は未見である。

(3) 猿猴庵の帰国時期

先に猿猴庵が天明6年の冬に江戸にいたとされる文頭の書き出しを見た。逆に猿猴庵の名古屋帰国がいつなのか、江戸出府同様に日記がない中でそれを確定することはきわめて難しい。日記は寛政13年(1801)から再び書き記されてはいるものの、それまでの江戸滞在を知るような関連記事は一切見受けられない。そこで猿猴庵の名古屋帰国の時期を推定する材料として以下の史料をあげてみる。

ひとつは、「藩士名寄」にみた寛政4年(1792)12月晦日の大番組への転任である。大番組入りを果たしたことで尾張藩の重職に就き、名古屋で大番の寄り合いが開催されたことなどを考慮すると、猿猴庵は寛政4年末までには名古屋に帰っていた可能性が高いことになる。名古屋市博物館も猿猴庵の名古屋への帰国時期を不確定ながら寛政4年と想定している。これを補完するために彼の作品からさらに検証してみたい。

先に紹介した『東街便覧図略』は、「天明六年暮秋」に猿猴庵が江戸へ下る際に街道筋にある名物や名所を収録した道中記スタイルの名所案内である。この自筆本とされる名古屋市博物館所蔵本の序によれば、「寛政乙卯十一月甲子」とあって寛政7年(1795)の成立が確実である。[22] 猿猴庵が江戸に滞在したとされる天明6年から9年を経た後に完成させたことになる。

この作品とさらに密接な関連を持つ黄表紙『きつひむだ枕春の目覚』は、『東街便覧図略』で紹介された各所の名物・名産が、本の完成を祝って猿猴庵のところへ礼にやって来るというストーリー展開を持つ。この本の中で、「すでに其年も暮て、寛政第八とあらたまりぬる辰の正月七日の日（後略）」と年代を明らかにする箇所があり、『きつひむだ枕春の目覚』は寛政8年正月以降に完成することはこれによってほぼ確定できる。さらに興味深い点は次の事柄である。

近比都名所図会をはじめ、諸州の風土を誌るし、或は地理の図をなす事、専世に流行せり。其が中に東街便覧とやらんいへる道中記ハ、上ハ勅撰の歌枕より、下ハくも助めしもりの穴迄さがせし細画と言ひ、又文談の野俗に通じ安きを以て、此書を一見の輩ハ、今迄名所に気のなき人々迄も、これがために古跡を尋の端となれり。さればおのづから名もなき地までも、旅人に知られてほまれを得の一助たる事、我々をはじめ、末々にいたり、火打坂の姥嬶までも、世に名をあげらるゝ事、ひとへに此本の恩恵によれり。されば彼本の作者方へ、何をもってかこれに報ぜんや[23]

ここからまずわかることは、『東街便覧図略』は『都名所図会』にはじまる図会ブームの影響を受けて作成された1冊だということである。『きつひむだ枕春の目覚』は文章の調子が良い黄表紙ではあるが、ここに猿猴庵の作成目的と当時の図会に対する意識の片鱗を読み取ることができる。その内容を読むと『東街便覧図略』は道中記として作られ、細画と分かりやすい文章によって構成されていることが明記されている。これによって「名所に気のなき人々迄も、これがために古跡を尋の端」となると本書の役割を評価している。ストーリーとしては、擬人化された各地の名産品や名所が、世の中に紹介してくれたことへの感謝をするために、作者のもとに御礼に行くといった内容である。そのなかで、本書に登場する名物名産たちの言葉によって年代特定をさらに限定する場面がある。

とかくたゞいまのはやり、名所図会と、水でつぽうでござります。うけたまわれば竹原春朝斎も東海道の名所図会を書ますげな。てまへが似がほハどのように書いてくれる。はやくミたいものじゃ。[24]

つまり、ここで話題にあげられた『都名所図会』は安永9年（1780）の刊なので、猿猴庵が黄表紙『きつひむだ枕春の目覚』を執筆するときには既に『都名所図会』の存在を十分知っていたことになる。さらにこの文章から『東海道名所図会』の刊行が近いこともわかる。実際、『東海道名所図会』は寛政9年（1797）の刊行である。

さらにこの2つの作品で重要なことは、『東街便覧図略』は熱田から江戸へ向かう内容構成であるのに対し、『きつひむだ枕春の目覚』は江戸から名古屋へ向かう構成をとっていることである。

かくて食家の一門安倍川をはじめ、あらゆる名産ども、はるばるなりし旅衣、三河の国も打過て、早尾張路に鳴海がた、有松しぼり之助がもとに落着、爰を旅宿とし、来辰の正月、福引の日限をぞ待かけける。[25]

ここでいう「来辰正月」というのは寛政８年にあたり、『東街便覧図略』の寛政７年の完成を祝って猿猴庵の自宅へ礼に赴くため、各地の名産・名物たちが名古屋にほど近い鳴海に集結している様子が書かれている。この記述から推察されることは、『きつひむだ枕春の目覚』を執筆したのは猿猴庵自身が江戸から名古屋へ帰った後ではなかったかということである。寛政７年の『東街便覧図略』の完成に際して、作者のいる名古屋に出向いて礼をするという設定は、『きつひむだ枕春の目覚』の完成時に猿猴庵は名古屋にすでにいたと考えるのが自然であろう。

以上のことから猿猴庵がしばらく江戸に滞在していたことは間違いなく、その帰国時期は決して明確ではないが、寛政４年に大番組を命ぜられるまでと一応考えられている。おそらくは『東街便覧図略』や『きつひむだ枕春の目覚』をまとめた寛政７・８年の可能性も推定でき、寛政８年には名古屋に帰っていたことが確実と考える。ちなみにこれ以降、日記などの記録で猿猴庵が江戸に出向いたという記述は見当たらない。このことは、この１回限りの江戸滞在で得た情報を基に『江戸循覧記』がまとめられた可能性が高いことを示していよう。このことは、後述する景観年代からも検証してみたい。

２.『江戸循覧記』の性格

(1)　「画誌」の画面構成

大惣こと大野屋惣兵衛の依頼によって貸本として世に出された『江戸循覧記』は、先に紹介した『東街便覧図略』や『きつひむだ枕春の目覚』と同様、名所や名物を取り上げた名所案内のひとつとして捉えることが十分可能である。それは、表１で示したような名所や名物等を具体的に取り上げた記述内容であったことからわかる。

『江戸循覧記』３冊は、１冊目が16丁、２冊目が16丁、３冊目が23丁あり、それぞれ見開きを単位にして項目を並べている。基本的にはタイトルを明記しているが若干タイトルのないものがあり、表では（　）内で記したものがそれである。タイトルを見る限り、その対象は明らかに名所景観、史跡、神社仏閣、屋敷、店舗、その他の建造物、名物、風俗、盛り場といったものである。猿猴庵の代表作に見られる題材の多くが、祭礼、芝居、開帳・法会、地理、風俗、名物、名所等であることからもそれはうなずける。

ところで本書には、図会などの地誌に一般的に見られる凡例が記載されていない。したがってこの本がどのような性格や特徴をもって編まれたものか、客観的に作者の姿勢を確認することがむずかしい。おそらくは序文としての役目を持つであろう、巻頭にあげた「日本橋」の記述から本書の性格の一端を垣間見ることができる。

> 爰かしこ一見せばやと所々見給りて、其真景を画誌とし、是を号て富士のゆめ見た江戸物語といふものなりし[26]

この記述から本書は、江戸各地をみた作者が「真景を画誌」した写実的な挿絵を掲載した「江

表１　『江戸循覧記』対象項目一覧表

通番	絵番号	絵数	タイトル	構図	建築建造	宗教信仰	人物構成	事件歴史	風俗行事	地理自然	備考
01	01	1p	日本橋	遠近図	橋・船・城					富士山・冬	江戸物語
02	02	2p	山王権現御社	俯瞰図	神社・諸堂	産土神・鰐口		太田道灌			江都第一の大社
03	03	1p	（山王権現社　楼門雌雄猿像）	目線	楼門	疱瘡守	猿の男・母子		猿の練物細工		猿像は疱瘡守り
04	04	2p	霞の関	遠近図	武家屋敷					坂	当国の名高き名所
05	05	2p	駿河町越後屋	遠近図	店・揚げ看板					富士山・往来	東都第一の呉服屋
06	06	2p	神田御茶水	遠近図	掘割・上水樋			万治年中	かばやき売り	富士山・川・松	お茶の水のうなぎ
07	07	2p	神田社	俯瞰図	神社・寺院	将門・大己貴命		平将門			彫り物極彩色
08	08	2p	本郷四丁目歯薬店	屋根越	店・破風	神農像	旅人・武士・親			往来	他に見なれず珍し
09	09-1	2p	小石川牛天神	俯瞰図	神社・寺院	天神・阿弥陀・大黒		北条氏康・了誉上人	牛石		大きい大黒堂珍し
10	09-2	〃	伝通院	俯瞰図	寺院	阿弥陀・大黒天		恵心僧都・了誉上人			大黒天井戸より出
11	10	1p	湯島天満宮	屋根越	神社・茶屋			太田道灌・亮恵法印	霊夢・参詣		
12	なし	なし	上野東叡山寛永寺圓頓院		殿門・楼閣・堂塔			慈眼大師・探信探雪		地名由来	江戸城の鬼門華麗
13	なし	なし	影向竹来由略					三国伝来・伝教大師		竹	
14	11-1	2p	不忍池	俯瞰図	堂・塔					池・蓮	
15	11-2	〃	忍の岡	俯瞰図	同					池・蓮	
16	11-3	〃	向ひの岡	俯瞰図	同					池・蓮	
17	12	6p	上野御山内之図真	俯瞰図	寺院・諸堂				広小路　花見	桜・春	東都第一花の名所
18	13	2p	上野山王社	屋根越	神社・鳥居	山王権現	旅人夫婦	寛永３年		桜	内陣拝殿彫刻美
19	14	1p	上野大仏	目線	仏像（大仏）	山王権現	僧侶・参拝者		参拝		
20	15	1p	上野鐘楼	部分図	鐘楼・龍	龍の出現伝説	僧侶・山王	左甚五郎			龍の彫り勢い絶妙
21	16	1p	上野雲水塔	部分図	塔・装飾						彩色結構
22	17	1p	煮売茶屋	目線	茶屋・店		客・老女		木札		見え悪き安売茶屋
23	18	2p	上野山下	目線	仮設小屋・店		芸人・宗教者・占				絶間なく賑々しき
24	19	2p	柳原封彊古手店	目線	仮設小屋・店		買い物客				往来常に絶せぬ賑
25	20	2p	両国橋	俯瞰図	橋			万治年中	盛り場・花火	隅田川・冬	冬川の体も珍し
26	21	1p	浅草御蔵前閻魔堂	俯瞰図	堂	閻魔信仰		慈覚大師・運慶			
27	22	1p	古石塔	部分図	塔（板碑）			文永１１年			
28	23	1p	（閻魔王）	目線	仏像	閻魔信仰		慈覚大師・運慶			脱衣婆の立像珍し

通番	絵番号	絵数	タイトル	構図	建築建造	宗教信仰	人物構成	事件歴史	風俗行事	地理自然	備考
29	24-1	2p	浅草川	俯瞰図						浅草川	
30	24-2	〃	駒形堂	俯瞰図	堂	馬頭観音		平公雅・天慶５年			
31	25	1p	駒形堂目がね店	目線	店		町人・買い物客				
32	26-1	4p	金龍山浅草寺伝法院	俯瞰図	寺院	霊場・三社	源頼朝・北条氏綱	推古朝・寛永年中			
33	26-2	〃	浅草観音境内全図	俯瞰図	寺院	弁材天					
34	26-3	〃	浅草三本栢八幡宮由来略	俯瞰図	神社	源義家		由緒・奥州征伐	楊枝		
35	26-4	〃	浅草寺境内熊谷稲荷由来略	俯瞰図		霊夢・白い狐	大岡大守	貞享年中・大岡大守			
36	26-5	〃	浅草寺境内本堂狩野法眼絵馬	俯瞰図							毎夜作毛荒らし
37	27	1p	浅草寺境内久米平内石形	屋根越	堂			久米平内・元禄7.8	願掛け		
38	28	1p	浅草観音堂破風之図	部分図	破風・鬼形						東都諸州に稀な堂
39	29	1p	神馬	目線					参詣諸願掛け		当山繁盛なるさま
40	30	2p	浅草楊枝店	目線	仮設小屋				酒中花　鶏		
41	31-1	2p	高田戸塚村	俯瞰図							
42	31-2	〃	水稲荷社	俯瞰図	神社						
43	31-3	〃	新富士	俯瞰図		富士信仰					
44	31-4	〃	穴八幡	俯瞰図							
45	32	1p	姿見の橋	俯瞰図	橋					川	
46	33	2p	雑司谷鬼子母神	俯瞰図	伽藍			弘仁元年	疱瘡神・風車商い		
47	34	2p	神齢山護国寺	俯瞰図	伽藍	観音霊場	黄檗湖音和尚	元禄年中		桜	護持院
48	35	1p	揚弓	屋根越	小屋				辻八卦・女郎・富付		
49	36	1p	大伝馬町	遠近図	商家・揚看板		町人				いさましき繁栄
50	37	1p	（古道具屋店先）	目線	店		辻芝居				
51	38	1p	（結納出来合い店鯛看板）	屋根越	看板装飾						
52	39	1p	十間店	目線			野菜売り・町人客		青物市場・干店		十間店＝十軒店
53	40	1p	（煮売り店）	目線	店				紅葉・牡丹		見立て
54	41-1	2p	芝愛宕	俯瞰図	伽藍　石段鎖	勝軍地蔵	俊賀和尚	慶長８年	茶屋	眺望	
55	41-2	〃	万年山青松寺	俯瞰図			青松氏	文明年中		桜川	
56	42	2p	芝愛宕茶店眺望	俯瞰図	山門		参拝者			眺望	この地の景勝絶景

通番	絵番号	絵数	タイトル	構図	建築建造	宗教信仰	人物構成	事件歴史	風俗行事	地理自然	備考
57	43	2p	芝増上寺	俯瞰図	寺院伽藍・大鐘	浄土宗　阿弥陀		浄土談林			江都第一の大がね
58	44	1p	赤羽	俯瞰図	塔　火の見櫓	水天の社					参詣絶えず繁昌
59	45-1	2p	増上寺東大門	俯瞰図	門						
60	45-2	〃	飯倉芝神明宮	俯瞰図	神社	神弊	源頼朝	寛弘２年			芝神明宮神縁略
61	46	2p	芝三嶋町	目線	店先				土産買い物		子供は動けぬ賑
62	47	2p	泉岳寺四十七士石塔場	屋根越	石塔			赤穂浪士一首洗井戸			世に知る所
63	48-1	2p	高輪泉岳寺	俯瞰図	寺院					海辺　街道	
64	48-2	〃	大仏	俯瞰図	仏像						
65	48-3	〃	芝浦					平安			
66	49	2p	大仏堂内之図	屋根越	仏像　堂内	五智如来	開山木食但唱				
67	50	2p	麻布善福寺	俯瞰図				弘法大師	楊枝		
68	51	1p	御杖銀杏	目線					乳を出す銀杏		
69	52	2p	渋谷金王八幡　金王桜	俯瞰図		夢告	弘法大師・源義家	久盛庄七郎産土神			
70	53-1	2p	目黒大鳥大明神	俯瞰図	神社	目黒総鎮守	日本武尊	大同元年	絵馬		おたふく面を奉納
71	53-2	2p	霊雲山蟠龍寺	俯瞰図	寺院	岩谷弁天			名馬の黒目		
72	54	2p	目黒不動龍泉寺	俯瞰図	寺院伽藍	荒人神　不動		日本武尊慈覚大師			日本武尊の神社多
73	55	なし	鷹居松由来略			伝承　火難除け		寛永年中			
74	56	1p	目黒本堂前銅像	目線	天狗銅像	寝形の像		奉納			寝形の像珍し
75	57	2p	目黒独鈷の瀧	目線	籠堂	行場		弘法大師		瀧　非渇水	江戸第一の名瀧
76	58	2p	目黒大水鉢	目線		百土参詣					東都繁栄の仏閣
77	59	2p	目黒餅花店	目線	店				福餅・粟餅・飴茶		
78	60-1	2p	御殿山	俯瞰図	館			長禄年中太田道灌		山	江戸第一の庭
79	60-2	〃	品川萬松寺東海寺	俯瞰図	伽藍			沢庵和尚	紅葉	庭	江戸にて一の紅葉
80	61	1p	東海寺万年石	目線					千年杉万年石		
81	62-1	1p	付録　けしめがね	部分図							
82	62-2	〃	付録　風流すき油	部分図							
83	63	1p	するめとねずみ	部分図							

戸物語」ともいうべき物語であったと確認できる。凡例を特に設けなかったのは基本的に絵を見ながら文章を読む「画誌」＝絵本のスタイルをとったからであろう。「画誌」＝絵本としての性格を実際の描かれ方で確認すると、図２のように一目瞭然である。画面いっぱいに細画が施され、その隙間に文字情報が所狭しと記入されているのがわかる。この特徴は、猿猴庵の他の作品の大多数に見られる共通の特徴である。すなわち、基本的に絵と文章は独立分離した状態ではなく、頁内で一体化しているのが猿猴庵の本づくりの最大の特徴と言ってよい。

図２のように、『江戸循覧記』は１項目に付き１枚の絵が対応する構成をとるけれども、厳密に言うとすべての項目に絵が付されているわけではない。また１枚の絵をベースに関連する対象項目を２つ、３つ付加するものもある。一例をあげると図３のように通番14からはじまる「不忍池」、「忍の岡」、「向ひの岡」は対象項目としては３つ並んでいるにもかかわらず、絵としては不忍池とその周辺を描いた図柄１枚だけで、各々独立した絵がついているわけではない。また、図４の通番９の「小石川牛天神」、通番10の「伝通院」のように、２つの項目が絵としては一画面に連続的に描かれ、文章記述されているケースがある。

したがって、「江戸物語」と称している本書は、作者はあくまでも「読み物」として何らかの情報を読者に対して発信していたことは間違いないが、それは「日本橋」で自らが指摘したように「真景を画誌」した絵本物語として見て楽しむものとまずは理解できる。

(2)　記述構成のあり方

絵本としての性格を色濃く打ち出してはいるが、凡例や構成などを説明する箇所が本書にはないため、地誌としての性格は満たしていないと指摘することもできる。一般的に地誌といえば、ある地域の地名、位置、地形といった「地理情報」を軸に構成されることが多い。例えば、『江戸名所図会』や『新編武蔵風土記稿』などは、日本橋、霞が関、上野、浅草、神田、本郷といった場所を、あるいは城北・城南、町名や郡名といった特定の地域ブロックを基軸に編集構成される。こうした地名や地域を列挙していくなかで、詳細な情報を組み入れていく構成をとる。詳細な情報とはすなわち、まずは城郭・寺社・墳墓・屋敷といった「建築情報」、坂・谷・山・川・道・池などの「地理情報」、これらに関連する歴史・由緒・人物・記録・古文書・目録・詩歌などの「歴史情報」、官職・氏族・組織・法制といった「社会情報」、習慣・行事・歳時・方言・伝説・俗説・土産といった「風俗情報」等々が整理されて、系統的かつ網羅的に記述されているのが普通である。[27]

ところで江戸時代の名所案内は上記のようにすべて地誌のスタイルを持つわけではない。中世以来の流れを汲み、仮名草子に属す物語的な名所記が隆盛であった江戸時代の前期、つまり17世紀後半までの文芸的特徴を持つ名所記は、必ず主人公が登場して各地の名所をめぐりながら道行文的な記述のなかでさまざまな情報に触れている。江戸では『色音論』や『竹斎』などがこれに該当し、名所旧跡を順にめぐりながら物語的に記述していく。[28] しかし、仮名草子が特

徴としてよく示す七五調の文芸的な色彩は、ここで取り上げる『江戸循覧記』にはまったく見られない。しかも登場人物を設定し、その人物が巡覧しながら説明する道行文スタイルでもない。作者の存在は文章記述の中の主人公にあるのではなく、文章の外に距離を置いて「著者」としての存在を確立している。その意味で本書の性格を構成面から判断するならば、仮名草子のような登場人物を介して名所などを説明する物語でもなく、純然たる地誌のように系統的に体系化されたものでもないと指摘できる。

むしろ、読み物的な性格を基本にしながらヴィジュアルな詳細情報も同時に取り入れているスタイルは、18世紀半ばから隆盛する絵本を冠したシリーズに注目しなければならない。表2の主な絵本一覧をみてわかるように絵本は宝暦から天明、文化頃まで数多く刊行される。このスタイルの性格は、絵半分、文字半分とも言われるように、絵と文章が混在する書物ということである。まさに『江戸循覧記』の持つ画面構成ときわめて近いものがある。猿猴庵が江戸に滞在した天明期はまさに絵本の隆盛期である。当時上方よりも隆盛を極めた江戸の絵本の影響を受けないはずがない。ただ、この時期多く出される絵本の内容は、儀礼や行事に関する事、職人諸職に関する事、そして艶本や遊戯娯楽に関する事が中心で、名所案内や地誌の内容を持つ絵本が必ずしも多いわけではない。

表2　主要絵本一覧

書　名	作者（絵師）	刊　行　年	類別
絵本江戸土産	西村重長／画	宝暦3年（1753）	
絵本吾妻花	北尾重政／画	明和5年（1768）	風俗
絵本続江戸土産	鈴木春信／画	明和7年（1770）	
縁本雄雌会頓理	勝川春章／画	安永8年（1779）	艶本
画本混雑倭草画	磯田湖竜斎／画	天明1年（1781）	艶本
絵本色好乃人武	勝川春章／画	天明5年（1785）	艶本
絵本物見岡	鳥居清長／画	天明5年（1785）	
絵本吾妻抉	北尾重政／画	天明6年（1786）	地誌
絵本吾嬬鏡	北尾重政／画	天明7年（1787）	地誌
絵本江戸爵	喜多川歌麿／画	天明7年（1787）	
絵本栄家大我怡	勝川春章／画	天明7年（1787）	艶本
絵本新玉発気	勝川春章／画	天明8年（1788）	艶本
絵本吾妻遊	喜多川歌麿／画	寛政2年（1790）	地誌
艶保夢志知婦集	勝川春章／画	寛政2年（1790）	艶本
絵本江都の見図	歌川豊国／画	寛政7年（1795）	
絵本太閤記	石田玉山／画	寛政9年（1797）	
絵本夜密図婦美	喜多川歌麿／画	寛政9年（1797）	艶本
絵本色能知巧佐	喜多川歌麿／画	寛政10年（1798）	艶本
絵本東都遊	葛飾北斎／画	享和2年（1802）	地誌
絵本小町引	喜多川歌麿／画	享和2年（1802）	艶本
絵本江戸桜	北尾重政／画	享和3年（1803）	
絵本江戸錦	歌川豊春／画	文化1年（1804）	
絵本東物詣	歌川豊広／画	文化1年（1804）	
絵本西遊記	豊広・北斎他／画	文化3年（1806）	読本
絵本江戸名所	十返舎一九／画	文化10年（1813）	
絵本江戸土産	歌川広重／画	嘉永3年（1850）	

「国書総目録」には18頁にわたって絵本類が収録されている。そのうち任意に抜粋したもの。類別には地誌・読本・艶本・合巻・教訓・黄表紙・狂歌・風俗・和歌などがある。備考欄の類別は「国書総目録」に従った。

以上、述べてきたように猿猴庵の著作には、江戸時代前期に見られる仮名草子のような文芸的な性格はない。対象項目別の記述からは、当時すでに刊行されていた『都名所図会』の影響が大きいと考えられるが、全体としては本格的な「図会」スタイルではなく「画誌」＝絵本の「江戸物語」として読ませる性格にとどまったのは、系譜的に当時隆盛の絵本からの影響によるものだといえよう。[29)]

(3)　貸本『江戸循覧記』の景観年代

『江戸循覧記』は天明から寛政期にかけて猿猴庵が江戸に滞在した時の情報を基につくられた名所案内ではあるものの、実際にまとめられたのはずっと後になってからである。このことは図5の巻末の記述によって確認することができる。

自然石にして頂のくぼみに水ありて清水なり。紅葉の折りから楓の影をうつして殊に見事なり。千年杉に万年杉を千鶴萬亀になぞらへ、猶此本を見る人の齢長かれと、寿を演て筆をとめ畢んぬ。めでたしめでたし。　七十三叟　猿猴庵画作之[30]

この本のタイトルが「循覧記」とあるように、この本は江戸を循覧＝めぐりみわたしながら名所・風俗を案内するといった性格を基本的に持つ。しかし、自分の旅行や移動に伴う手記やメモではなく、相手に読んでもらおうとする作者の編纂意図がここには強く表されている。ここに示した巻末の記事にあるように、この本を自筆着色でまとめたのは猿猴庵が73歳となる文政11年（1828）にあたり、しかも記述内容から判断すると紅葉の季節ということになる。猿猴庵が江戸に出た天明６年から数えて実に42年の歳月がこの間流れている。当然、江戸に滞在した時期に江戸の各所をまわり、『江戸循覧記』をまとめた草稿か下絵となるものを書き残していた筈であろうが、今それを確認するものはない。なぜ、このような時間が経過した後に作成したのかはなぞである。ただ、猿猴庵のほかの著作物の成立状況をみると、貸本屋大野屋惣兵衛との関係が濃厚になるのは壮年期から晩年あたりからで、この時期には依頼による貸本を多く手がけていたことがこれまでの研究で明らかである[31]。

本書の装丁やこの本の成立の時期からすると、猿猴庵の残した数多くの著作物と同様に江戸滞在時期から後になってあらためて「読ませる意図」をもって作成し直されたことが濃厚である。貸本として読ませる意図を持つ本の場合、「後観に備ふる」「万歳の不朽に伝えん」「児女の慰本として後世までの咄しの笑ひの種まき」と猿猴庵自らがいくつかの著作物の中で述べていることからもわかるように、作成にあたっての猿猴庵の姿勢は徹底している[32]。また猿猴庵が記録好きで、まめにさまざまな事件や出来事を記録し、細画と呼ばれる非常に細かい描写と余白全体に記された文章は、「読む」「見る」を十分に堪能させる内容構成になっている。したがって、全体の構成からも『江戸循覧記』は作者の手控えや個人的なものではなく、明らかに読者を意識してつくられた「読み物」であることは確実である。

さらに「物語」としての全体のスタイルが確認できるのは、巻尾「東海寺萬年石」に掲載された「猶此本を見る人の齢長かれしと寿を演て筆をとめ畢んぬ。めでたしめでたし」で終わる文章であろう。厳密にはこの後に「其此東都に流行し品々の一二を爰に出す」として「けしめがね」「風流すき油」「ねづみ土細工」の項目を立てて絵入付きの「付録」をもって終わる。いわゆる物語の結びを読者への縁起かつぎと流行ものによって締めくくられるのは、読者を意識した読み物としての完結性を強く打ち出していると理解できる。

名所案内の「読み物」として本書が地方の人に読まれることを想定すれば、名所・旧跡、由緒・来歴をただ並べるだけの名所案内だけではなく、江戸での名産や土産、店舗など民衆にきわめて身近な事物を加えて、読み手の「江戸が知りたい」といったニーズに応えようとする作者のサービス精神を理解することができる。最後の「付録」に当時の流行が取り入れられているのは、タイムリーな情報を盛り込むことで読者の吸引力を高めているといえよう。

ここで問題なのは、天明期に江戸に出た猿猴庵が、そこで入手した情報を基に40年余り後にまとめ直しているのであれば、この本に描かれた絵の内容はいつの段階の景観を描いたものなのかということである。『江戸循覧記』の基本的な性格としてここに描かれた景観年代をあらかじめ知っておく必要がある。

まず通番25に見られる遠近法を駆使した「両国橋」で、その画面の一番奥にかすかながらに大川橋（吾妻橋）が確認できる。大川橋は安永３年（1774）９月に架橋されることから猿猴庵が江戸に滞在した時期には既に存在していたことになる。ただし、通番30の「駒形堂」には大川橋の姿が見受けられない。構図の関係で単純に視覚に入らなかったか、空間的なデフォルメなのか、水害での破損なのかははっきりしない。また高田戸塚村にはじまる通番41には新富士と称する安永９年（1780）５月に成就する石積みの富士塚が描かれている[33]。一方、通番47の神齢山護国寺には「此の寺内に西国三十三所のうつしの観音ありて順礼する人おほし」と記されている。これは天明２年から観音霊場の写しを建立しはじめることに対応している。さらに通番40の図６に描かれている「酒中花」の楊枝店は安永年間のはやり物として紹介されている[34]。また図中には女性の着物姿があるが、安永頃から女性の前結びの帯が消えていく傾向にある。ところが『江戸循覧記』では前結びもあれば後ろ結びもあり混在している。このことは風俗的には安永から天明頃、すなわち猿猴庵が江戸に滞在していたころの風俗を描写していると考えてよいのではないだろうか。巻末付録に載せられた「けしめがね」「風流すき油」「ねづみ土細工」の年代的な裏付けはできなかった。

さて検討を要するのは浅草寺雷門である。『江戸循覧記』では通番33、図７の「浅草観音境内全図」（２枚続の内１枚）には俗に言う雷門が描かれている。浅草寺境内の総門にあたる風雷神門は明和４年（1767）４月９日に焼失し[35]、その再建は寛政７年（1795）３月で、約30年の歳月を要している。再建工事は寛政５年９月の釿初めより翌年６月から８月にかけて地突きが行なわれ、閏11月に立柱が行なわれ、翌寛政７年３月に開門となる[36]。この事実から猿猴庵の江戸での行動をどう解釈したらよいだろうか。天明６年冬に江戸へやって来た猿猴庵が浅草で見た雷門は焼失して無かったのではなかったか。しかし『江戸循覧記』には雷門が描かれており、寛政７年３月まで江戸に滞在していた可能性を示唆している。先に検証したように猿猴庵の名古屋帰国の時期が寛政７・８年であったこともあながち否定できないのではないだろうか。少なくとも寛政４年の猿猴庵帰国時期は再考の余地がある。

３．都市を見る視点

(1)　『江戸砂子』の影響

ここでの課題は、猿猴庵が描いたり記述したりした個々の対象内容が、それぞれどのように捉えられていたかの分析である。特に他の名所案内や地誌との相違が見られるのか否か、猿猴

庵が江戸をどのように把握していたのか、個々の描写と記述に焦点を当てて見ていくことにする。

『江戸循覧記』のなかで地誌的なスタイルと似ている点があるとすれば、対象地ごとに系統的な記述スタイルを採用している点で、次のような記述構成の展開パターンが見られる。

タイトル、呼称・地名由来、場所・所在地、歴史・由緒、伝承、引用記事

これらの項目の列挙はその対象によって内容や種類が異なり、『江戸循覧記』の内容全てにわたって同じ記述構成の展開パターンを持っているとは言い難いが、概ねこの内容を網羅していると言ってよいであろう。さらに付け加えるならば、これに詩歌と引用文献の出典書籍名が加わることが多い。この点は典型的な名所案内のスタイルを継承している。

さらに引用に供した出典文献名を確認してみると次のような文献が登場する。

更級日記（康平３年･1060ころ）、尭恵紀行、迴国雑記、平安紀行、元寛日記（元和～寛永期）、名所方角抄（寛文６年･1666）、紫の一本（天和３年奥書･1683）、一目玉鉾（西鶴回国道之記　元禄２年･1689）、東叡山新建立瑠璃殿記（武州東叡山新建立瑠璃殿記　元禄12年・1699）、江戸砂子（享保17年・1732）、拾遺続江戸砂子（続江戸砂子　享保20年・1735）、本朝世事談綺（享保19年・1734）、再校江戸砂子（明和９年・1772）

これによって作者猿猴庵がどのような文献を駆使していたかが理解できるが、その多くは実は猿猴庵自身が引用したものというより、すでに『江戸砂子』に載せられた文献からの引用であることが多い。最も多く引用している『江戸砂子』[37]と本書の関係を今少し掘り下げて、猿猴庵が江戸という場所の歴史的情報をどのように受け止め、記述しているのか確認してみたい。

その例として、『江戸循覧記』の駒形堂部分をあげて検証してみたい。尚、タイトル脇の番号は表１の通番にあたる。

駒形堂　30　『江戸循覧記』

朱雀院の御宇、天慶五壬寅年、安房守平公雅建立なりといふ。本尊馬頭観音なり。よつて馬を作りて諸願を祈る。その作りたる馬、堂中にみちみちたり。さるによりて世俗駒形堂と呼びならハすと也。此河岸に浅草寺住職権僧正宣存立る所の碑ありと。江戸砂子に見ゆ。

駒形不動　『江戸砂子』

朱雀の御宇、天慶五年に安房守平公雅建立なりと云。本尊、馬頭観音也。よつて馬を作りて諸願を祈る。その作たる馬、堂中にみちみちたり。さるによつて世俗駒形堂と呼習す也。川きしに浅草寺の住職宣存立ル所の碑あり。此銘、わけてすぐれたりとぞ。

ここに示したように文章の記述内容に大きな差異は見られない。「『江戸砂子』に見ゆ」と記述するとおり、その内容についてもほぼ同じである。一字一句違わないわけではないので、猿猴庵は『江戸砂子』に依存しながらも自分の言葉で多少かみ砕いた文言で記述していることがわかる。

さらに次のような事例を示してみたい。

目黒餅花店　77　『江戸循覧記』　　（下線は筆者・以下、特に断りのない場合は同じ）

江戸砂子に言ふ、当所の産。餅花御福の餅・粟餅・川口屋飴・門前茶屋多くと云々。（中略）拾遺続江戸砂子に言ふ、赤白黄に彩竹を割て花慢のごとくに結び、かの彩たる餅を小粒にしてこれをかざり、或ハ松・柘・正木の枝にかづかづながく。ひとしき花を咲せりと云々。

目黒不動　『江戸砂子』

（前略）当所の産　餅花　御福の餅　粟餅　川口飴屋。

目黒餅花　『続江戸砂子』[38]

目黒の名物也。赤白黄に彩り、竹をわりて花慢のごとくに結び、かの彩りたる餅を小粒にしてこれをかざり、或は柘植・正木の枝にかづかづながく、ひとしき花を咲せり。

目黒不動の基本的な情報はここでは割愛したが、目黒不動の開山記事や神体尊像の由緒伝来などの紹介に大部分があてられている。最後にのせた目黒の名産記事について猿猴庵は見逃さず、『江戸循覧記』には『江戸砂子』からの引用と思われる箇所が随所に見られる。このことは「目黒餅花」でもわかるように『続江戸砂子』の記事を引用しており、猿猴庵が参考にしているのは享保17年に出た最初の『江戸砂子』ばかりでなく、享保20年の『続江戸砂子』も引用していることがこれによって明白である。

このように『江戸砂子』の引用は、『江戸循覧記』全体にわたって関係しているわけであるが、次のような特徴も見られる。

麻布善福寺　67　『江戸循覧記』

（前略）その外さまざまの説あれど布の字を書ハあやまりなり。麻のよく生ずる所ゆへに麻生と書がよろし。歌に浅芽生のなどよめるに同じと江戸砂子に見ゆ。

麻布の地名　『再校江戸砂子』[39]

此麻布の説、甚誤也。麻生の地名は能麻の生る地にて、布の事にはあらず。又浅茅生といひて草の浅々と生る地をいふとも云。これは浅生也。古来の御図帳には麻生と書しよし、古老申伝也。

ここに示したように麻布の地名に関する記事に至っては、『江戸循覧記』の記載内容に相当する記事が『江戸砂子』や『続江戸砂子』には見られず、実は明和９年の『再校江戸砂子』の記事を参照した内容であることがわかる。麻布善福寺に関する内容はごくごく基本的な歴史由緒に関する内容でしかない。

したがって以上の例示によって猿猴庵が『江戸循覧記』を作成するにあたって参考にした文献の基本は『江戸砂子』であることは間違いないが、『江戸砂子』『続江戸砂子』『再校江戸砂子』

の3作品を見ていたことになる。前に列記した多くの文献の年代を見てみると『再校江戸砂子』以降のものは実は見当たらない。このことは、『江戸循覧記』が文政11年の作成にもかかわらず享保期から明和期あたりの作品引用で終わっているのは、『江戸循覧記』を構成する情報が、猿猴庵が江戸で見聞したり感じたりした情報と、さらに『江戸砂子』などの文献情報に大きく依存していたことを示しているものである。

猿猴庵の江戸に関する最大の情報源が『江戸砂子』なのは、『江戸循覧記』の成立年代にも関係している。猿猴庵の江戸出府時期が天明6年から寛政4から8年頃までと推定したが、その当時江戸に関する地誌の代表は『江戸砂子』であった。それは『江戸循覧記』が成立する文政11年においても基本的には変わってはいない。江戸で最も著名な地誌である『江戸名所図会』は天保5年と同7年の2回にわたって刊行され、『江戸循覧記』ができる時点ではまだ公にはなっていないのである[40]。したがって、江戸の地誌、名所案内に関する情報が『江戸砂子』からというのは当然の事になる。

一方、挿入された絵に至っては、『江戸砂子』と結び付けるものがない。図8―1は『江戸砂子』に挿入された「山王宮」の挿し絵であるが、ほとんど平面的な描写で俯瞰図としての技法は未熟に終わっていると言ってよい。対象内容の全体構図は良しとしても、その技法は猿猴庵の足下にも及ばないぐらい未発達である。『江戸砂子』の絵が『江戸循覧記』に影響を与えたということはひとまず否定してよいだろう。

むしろ『江戸名所図会』の挿し絵との関連を想起させる絵があるが、前記したように『江戸名所図会』の成立年代とは時期がずれるため、直接的な関係は考えにくい。しかしながら図8―2のように『江戸名所図会』にみる「日吉山王神社」は、町絵師長谷川雪旦による線遠近法を用いた俯瞰図であり、この構図や内容から図8―3に見られるように『江戸循覧記』の「山王権現御社」と非常によく似ていることは否定できないであろう。この場合、二つの作品の制作年代のズレはどう解釈したら良いのだろうか。単純に江戸のなかでもポピュラーな名所のパターン化された構図の描き方が採用されたと考えられなくはない。さらに図9―1・2・3は『江戸循覧記』の「駿河町越後屋」と『江戸名所図会』の「駿河町三井呉服店」と歌川広重の『名所江戸百景』との対比である。構図的に似てはいるものの細部についてはあきらかに描き方が違う。例えば、『江戸循覧記』での大暖簾には、三井のマークが白地に墨文字の「井桁と三」を組んでいるが、『江戸名所図会』では黒地に白抜によって同様な情景を描写している。これは構図としては両方似ているけれども、細部については全く同一ではないことを示している。これは『江戸名所図会』を見て真似たとは少なくとも考えられない挿し絵である。構図系譜の問題は19世紀における名所絵全体の問題として取り組む必要があると考えられるが、ここでは特徴の指摘にだけとどめておくことにしたい。

(2) 「江戸第一」主義

先の例示のように、『江戸循覧記』は『江戸砂子』のかなりの部分に依存している。それは猿猴庵のオリジナリティーの欠如ともつながりかねないのであるが、『江戸砂子』の記載内容を猿猴庵がどのように受け止めて『江戸循覧記』に記述しているかを見てみたい。

猿猴庵の江戸認識を知る手掛かりは、次のような項目の内容で確認することができる。

『江戸循覧記』	『江戸砂子』
①山王神社　02 御城中　御産土神にして承応三年御建立の地となり。神殿巍々たる粧ひ実に江都第一の大社たり。	江都第一の大社、神殿巍々として、石の鳥居、五十三段の石階、松柏枝をつらね神光高し。今以御城中御産土神にして御建立の地なり。
②霞が関　04 江戸砂子に云ふ。当国に名高き名所なり。往古ハ奥州へ往還なりといへりと云々。	当国名高き名所なり。往古ハ奥州へ往還なりといへり。
③駿河町越後屋　05 二丁四面にして両がわの店なり。正面と横に八枚の揚かんばんあり。前二方は店。後ハ蔵なり。実に東都第一の呉服屋なり。	
④上野御山内之図真　17 御門前の町を上野の広小路と呼んで種々の辻商人等常に絶せず。市をなし賑しき所なり。（中略）これ自然と吉野の風をなす。実に東都第一の花の名所といふべし。	
⑤目黒独鈷の瀧　75 江戸砂子に言ふ。大師とつこを以、地をうがちたまふに、瀧水湧出。よつて此名ありと云々。（中略）元来此水清潔にして大ひでりに江戸第一の名瀧たり。	大師とつこを以地をうがち玉ふに、瀧水涌出スよつてとつこのたきと云。むかしは流三口あり。今は一瀧なり。源は山上の清水、清潔にして大旱魃にも涸る事なし。江戸の名瀧なり。
⑥御殿山　78 長禄年中太田道灌の舘ありて、その庭なりと	

いふ。今ハ東海寺山とつゞきて寛永中、小堀遠州侯好の庭ありて江戸第一の庭といふ由。	
⑦東海寺　79 扨此寺の庭ハ風流にして、殊更に深秋の頃は数珠の楓有て、紅葉見事なれば、遊人日毎に絶間なく賑ハし。江戸にて一のもみじのながめなり。	当寺は紅葉の名所なり。

このように列挙してみるといくつかの特徴が指摘できる。

山王の「江都第一の大社」、霞が関の「当国名高き名所」、越後屋の「東都第一の呉服屋」、上野の「東都第一の花の名所」といったように江戸でも一、二を争う優れた名所が巻頭に示されているという点である。これらの対象は江戸名所として客観的に誰もが認識する場所であり、共通の意識に基づいていると考えるのが自然であろう。

対比したように『江戸砂子』にもいくつかの対象については記載されており、しかも、その記述内容はきわめて似ている。猿猴庵が『江戸砂子』を意識し、参照したことはここでも疑いのないことである。

ところで、名所が名所たりえる条件はいったい何か。誰もが共通の観念や意識によってその場所や空間を捉えていなければ名所としての一般化はありえない。複数の共有された認識を持たなければ、その人だけの特別の場所で終わる。したがって越後屋を江戸随一の呉服屋と認識するのは、誰もが「江戸一の呉服屋」と思う共通の意識に支えられた表現である。猿猴庵が『江戸砂子』からそのまま筆写したとすることも考えられるが、『江戸砂子』の記載に対して猿猴庵本人が対象を見て素直に共感したと判断するのが妥当ではないかと考える。この点については次節でもう少し展開してみたい。

また猿猴庵は、ただ『江戸砂子』の記述を単純に写しただけとは到底考えられない。例えば、上野や御殿山のように別の対象を見ると、『江戸砂子』に記載がないにもかかわらず、『江戸循覧記』には、「東都第一の花の名所」といった言葉で記されている箇所がある。それは、猿猴庵自身の言葉によって対象が捉えられている部分が随所にあることを示している。つまり、『江戸砂子』に影響を受けながらも、猿猴庵自身が実際に見て共感し、感じた言葉として表現し直していると理解したい。人間の観念的な部分は千差万別で理解しがたい部分も当然ある。しかし、同じ対象を同様な感覚で認識することも少なくない。それだけその対象が情報として客観化され、共有されているといってもよい。

『江戸循覧記』の巻頭にあげられている山王・日本橋・越後屋などは、他の名所案内や地誌にしても筆頭クラスの名所としてよく知られている対象である。ここで注目すべき点は、その名所がなぜ名所なのかといった本質的な理解である。それは将軍家の産土神を祀る権威と格式

ある神社であり、大規模経営を展開する呉服屋の大店であり、また人々が集い、楽しみ、憩う愛すべき花の名所としてなど、ある対象が江戸で最も価値ある場所として普遍的に捉えられ、情報が発信されているということである。また、目黒独鈷の瀧を「江戸第一の名瀧」とするなど、その他に御殿山の「江戸第一の庭」、東海寺「江戸にて一のもみじ」、増上寺の「江都第一の大がね」、赤羽有馬家の「江戸一番の火の見」なども表1によって確認できる。人間の価値観には多様性があるが、これらを皆「東都第一」を象徴する名所として客観的に認識して、誰からも共通に理解できる存在であることがまず重要である。ここに猿猴庵の江戸に対する認識のあり方の一つとして、ある特定の場所や空間に向けられた「第一主義」の視点（＝ものさし）を確認することができる。

(3) 建造物への執着

次の特徴として指摘できるのは、猿猴庵の独自の江戸認識である。これは、『江戸砂子』にはほとんど記載されていない情報で、なかでも特筆すべき点は猿猴庵独自の視点からなる江戸認識である。

猿猴庵の建造物に対する意識で、図10で示すように「上野雲水塔」の彫刻に対する美辞は、『江戸砂子』の無味乾燥的な文章からは想像できない独自な解釈と記述に満ちている。つまり、『江戸循覧記』の記述全てが『江戸砂子』に依存しているわけでないことがここでもわかる。しかも、他の対象もつぶさにみていくと『江戸砂子』には何も記されず、『江戸循覧記』にのみ記された言葉もいくらか見られる。とりわけ猿猴庵の建造物に対する執着心は突出したものがあり、その文章表現には他の文献の引用によらない彼自身の言葉で書き記したものが大半と理解する。いくつか整理して指摘してみたい。

神田社　07

扨当社ハ諸殿花麗にして本社拝殿銅の瓦を黒ぬりなるに、端瓦の巴ハ金紋を付たり。其外彫りもの極ざいしき、楼門も同じ様なり。

本郷四丁目歯薬店　08

此家の破風に白土を以て神農の像をつくる。他に見なれず珍し。

伝通院　10

寺中昌林院の大黒天ハ境内の井より出現の霊像なり。斯のごとき大黒堂の大なるは世に珍らし。

上野雲水塔　21

彩色結構にして升組の象ばな獅子ばな美麗をつくせり。惣て彫刻物うつくしくて、あるへ

い糖の菓子をつらねたるに似たり。或は雲と波のかたちをなす。是を雲水の塔といふにや。前に画し全図には、細画故其形分がたければ大絵になして爰に著す。

数例をあげてみたが、どれもが江戸の建築物そのものあるいは建築様式に対して、あるいは規模の大きさや美しさに対して感嘆している。こうした猿猴庵の視点は『江戸循覧記』だけに限られたものだけではない。やはり東洋文庫に所蔵される『荒子上棟之図』では、地元愛知郡荒子村観音堂の再建の棟上げ式の儀式や参詣の様子を記し、また国立国会図書館所蔵の『名陽東御坊繁昌図会』にも名古屋東本願寺の由緒、建築の歴史、再建の様子を記して建築物への関心が高かったことを示している。これらは必ずしも、建築そのものを正面からまとめた本ではなく、再建にともなう上棟式や参詣風景まで含めた生活風俗的な全容をまとめているものである。したがって、建築物や建築様式美に対する関心は、元来猿猴庵自身が持ちえていたものと判断したい。

また江戸における建築物の「華麗」「美しい」といった形容、さらに「大きい」「珍しい」といったこれまでの経験的な建築物の情報と比較した上での言葉が記されている。このことから『江戸循覧記』は、猿猴庵の江戸の建築物に対する独自な把握、すなわち規模や様式美といった視点に注目し、絵画によって視覚的に表現された内容を特徴に持っているといえる。そこには名所絵としてパターン化した構図としての絵画に加えて、猿猴庵自らが認識した建築対象を再現したものが少なからず存在していることを示していよう。このような表現は、単に建築・装飾に対する荘厳さや奇抜さばかりでなく、それらが江戸の景観や風景として構成するシンボリックな対象と江戸らしさの発見だったと理解することができる。

(4)　日常生活へのまなざし

他の著作物でも見られるように猿猴庵の関心は、祭礼・法会・開帳・縁日といったハレの行事に大きく注がれているにもかかわらず、『江戸循覧記』ではこうした祝祭的な行事や場を正面から取り上げている記事は意外に少ない。図11は上野寛永寺に近い上野山下と呼ばれる盛り場の様子を取り上げている。鐘をつくるために幟を立て各地を巡り喜捨を仰ぐ勧進聖や、辻々などで祈禱をしたり大道芸を演じるちょぼくれや占い師など、盛り場を構成する宗教者や大道芸人とそれを取り巻く人々の様子を描き出している。このように盛り場の様子を描いているのは前にも取り上げた図７の通番40の浅草楊枝店ぐらいで、浅草寺境内にある酒中花を名物とする水茶屋や楊枝店の様子を取り上げている。

すなわち『江戸循覧記』では祝祭的な場面は少ないが、日常的に営まれる商売の店先を題材にした人々の様子や営みに視線が注がれている点に大きな特徴がある。つまり従来の名所絵のような定型化された構図の中には無縁であった対象が、『江戸循覧記』のなかでは中心的な視覚対象として描かれているのである。そのことがどのような意味を持つものなのか考えてみる必要がある。

煮売茶屋　22

草双子・にしき絵に江戸の茶屋のてい、いづれも美女を画くハ大通場出むきの上品の茶屋なり。爰にあらハせしは至て見へわるき安うり茶屋にして、客ハ馬かた、駕篭かき、棒かつきの仕度する小茶屋のていなり。

図12の「煮売茶屋」では、鈴木春信などの錦絵で知られた美人茶屋のイメージと全く違うことを記している。明和年間には鈴木春信の描く錦絵にもあるように、谷中笠森稲荷境内の茶屋鍵屋のおせんや浅草奥山の楊枝店柳屋のおふじなどが美女として実際有名であったようである。しかし明和年間から20年も隔てていない天明期の猿猴庵の視線はごく普通の茶屋に向けられたものであり、脚色せずにリアルに再現したことがかえって絵画的に美化されたイメージとのギャップを生んだものと理解される。通常、土産物として江戸から地方へもたらされることが多かった江戸の錦絵や名所絵は、江戸へのあこがれを掻き立て、都市の繁栄ぶりを示す情報手段であり、江戸から国元へ戻った人たちが鼻高で自慢するアイテムのひとつであったに違いない。そこには現実の生活場面は不要で、美化された世界が描かれている方が評判は高かったはずである。しかしながら『江戸循覧記』に描かれた情景や景観の客観的なあり方は、絵画のもつ非現実的な一面を示すものではなく、あくまでより現実的な描写を強調しているように思われるのである。

ではなぜ猿猴庵はあえて「見へわるき安うり茶屋」の情報を出したのかが問題である。

楊弓　48

楊弓の假屋諸々におほし。江戸に数多あるものは辻八卦と安女郎やと宮寺の富つきなり。爰に画しハ屋敷小路に楊弓の小屋あるさま珍らしなればあらはす。

例えば図13では、江戸における楊弓場、占い、富突、遊女が多いことを率直に述べている。ただ楊弓場のある場所は、通常盛り場などにあるはずが、江戸では武家屋敷の並ぶ小路のなかにあることが珍しいと記している。江戸の楊弓場が武家の屋敷町に多く存在するのかどうかは、この記事だけで判断することは到底できないが、事実として存在したことは間違いないようである。[41]

猿猴庵のここでの視点は、「屋敷小路に楊弓の小屋あるさま珍らしなればあらはす」と言っているように「珍しさ」の強調である。武家屋敷の小路にまで楊弓場があることが珍しいと言うのは、猿猴庵の意識として「楊弓場は盛り場にあるもの」という前提をまず理解せねばなるまい。つまり、猿猴庵の「珍しさ」の背景には、威厳や格式ある江戸の武家屋敷に本来あるまじき施設であり、自分も武士であるが故に猿猴庵がこれを描いたのは、娯楽遊興の施設が屋敷小路まで入り込んでいるという都市江戸の実態に驚きや皮肉を投げ掛けていると理解したい。

古道具屋店先　50

江戸にて又珍しきハ古道具屋の店なり。槍・長刀数多立ならべたるさまは、さながら五月の節句を見るが如し。

図14でわかるように、槍・長刀などの武具が五月の節句を思わせる程たくさん店先に並んでいる風景は、これもまた武都としての性格を江戸以外の人の視線から捉えている一例である。通常は骨董類や日常で使用したものが多く並ぶのであろうが、ここ江戸では武家から出される武具が多い事を示している。武士の人口密度や住宅事情などを考えると武具甲冑の類はこうした運命をたどるのであろう。しかも江戸時代も半ばが過ぎ、平和な時代では甲冑も実用的なものというよりは装飾的な意味を持ちつつあったのであろう。猿猴庵はこうした通例ではないところに「珍しき」古道具屋として認識したのである。

このような日常的な事柄に着目して、人々の営みをリアルに表現しているものは、図15「柳原封彊古手店」の古着屋、「駒形堂目がね店」の眼鏡屋、「結納出来合い店」、「十間店」の市場、図16「芝三嶋町」の土産屋と絵草紙屋、「目黒餅花店」の土産屋等である。店先や商売の様子を示す箇所が多く、単なる江戸の名所や景観を描くばかりではなく、庶民の日常的な生活の中に密着した場所や店先等を描いているところは、他の名所案内や地誌には到底ありえない性格を有したものと指摘することができる。

さてこれらの日常的な生活場面や営みを対象にした項目について、猿猴庵が描く絵の構図にはある共通した特徴を見いだすことができる。それはどれも皆目線かせいぜい屋根位の低い視線で描かれているということである。逆に俯瞰図を主とした内容は、寺社や景勝地全体を写実的に、しかも網羅的に描写することが多いということである。つまり、図８－３の「山王権現御社」や図10「上野雲水塔」のような歴史的な建造物は俯瞰することでその全体を理解し、図11以下のような日常的でより具体的な所作や様子を示す必要がある場合、目線の高さで描くことが有効となる。したがって二つの技法的な使い分けは、描く対象の何を示そうとしたかによってある程度決まっていたといってよい。

生活や風俗場面を低い視線でしかも近接して描くのは、名所絵ではすでに『都名所図会』にその技法的採用がみられる。『江戸循覧記』が成立した時期には『江戸名所図会』はまだ刊行されてはいなかったが、『都名所図会』は猿猴庵が江戸にいた時期にはすでに刊行されている。また、近世前期の例えば「江戸図屏風」のような俯瞰描写による都市の視覚化は、その後に日本橋や新吉原などが部分図のようにクローズアップされて切り取られ、それぞれが都市江戸の商業なり遊興の場を象徴する場所として独立して認識されるようになるが、名所景観として描く場合には俯瞰的構図が伝統的に継承され、人々の様子や仕種を示す生活景観を描く場合は目線にまで下りて描きだされる傾向が生じてくる。こうした技法的な使い分けはすでに菱川師宣の頃からその萌芽を見る。[42] さらに、18世紀後半から19世紀にかけては、西洋画の影響から線遠近法の技術的な導入確立により、絵画の世界では浮絵の隆盛、版本では近接的な生活風俗を多く描いた絵本が続々と出された時期でもあった。そのなかでも猿猴庵は比較的早い時期に遠近法と俯瞰図を表現技法として創作活動のなかに取り入れていたことは間違いない。

以上の分析からいくつかの猿猴庵の江戸をみる視点＝まなざしが明らかにできたように思え

る。それは『江戸砂子』に依存しながらも自分の視点を明確に持っているということである。「江戸第一主義」と称して理解する江戸の一番に該当するさまざまな対象への認識、さらに建造物の華麗さや美観への執着、日常生活的な景観への目線を下げた把握があげられる。猿猴庵のまなざしの奥には華やかでにぎやかな江戸の姿を捉える一方で、江戸以外の人々があこがれ抱く江戸への先入観を崩し、現実を直視する冷静な視点が存在していたと解釈できる。そこにこの『江戸循覧記』をパターン化した名所案内ではなく、資料として見る客観性と意味があるように思われる。

4．都市空間の把握

(1) 平面的空間把握

さらに本書の詳細な特徴を分析するため、猿猴庵がこの『江戸循覧記』で取り上げた対象がどのような範囲にあったか、対象地の平面的配置をまず表示することで江戸という地域全体の把握に関する特徴を明らかにしておきたい。

図17は、猿猴庵が天明頃に江戸に滞在していたことを考慮し、吉文字屋版天明改正の江戸絵図にその対象地を落としてみたものである。基本的には表１に基づく全項目83の内75の位置が明確な対象の通番で対応させている。黒丸の脇にある数字が項目の番号である。この内８項目については場所がはっきり特定できないが、項目の並びにしたがって便宜上白丸（円）で配置した。

『江戸循覧記』では凡例と目次を明記していないので、例えば江戸の城南、城北のような地域ブロックで明確に区分する目次立てがない。また『江戸鹿子』のように自然や寺社、坂、橋などのような項目の種類によって構成しているわけでもない[43]。図17で示した分布状況を検討していくにあたり、あえて地域ブロック別に整理してみると次のようになる。

江戸の中心部　→　湯島・上野　→　浅草・両国　→　小石川・高田　→　芝・高輪
→　青山・渋谷・目黒　→　品川

すなわち江戸城の内堀の外側地域がまず筆頭にあるのは、他の地誌と同様のスタイルを基本的に持っていることを示している。江戸の地誌を紹介・説明する場合、まず江戸城を中心とする周辺地域をはじめにもってくるのが常である。ただし、仮名草子に含まれる道行文的な文芸作品では、街道にそった特定の場所を紹介しながら江戸の中心に向かっていくのでこの限りではない。

「日本橋」「山王権現」「霞の関」と『江戸循覧記』の最初を飾るこの３つは、都市江戸を代表する定型的な名所であり、江戸の中心に配置されている。それはただ橋があるからとか、古

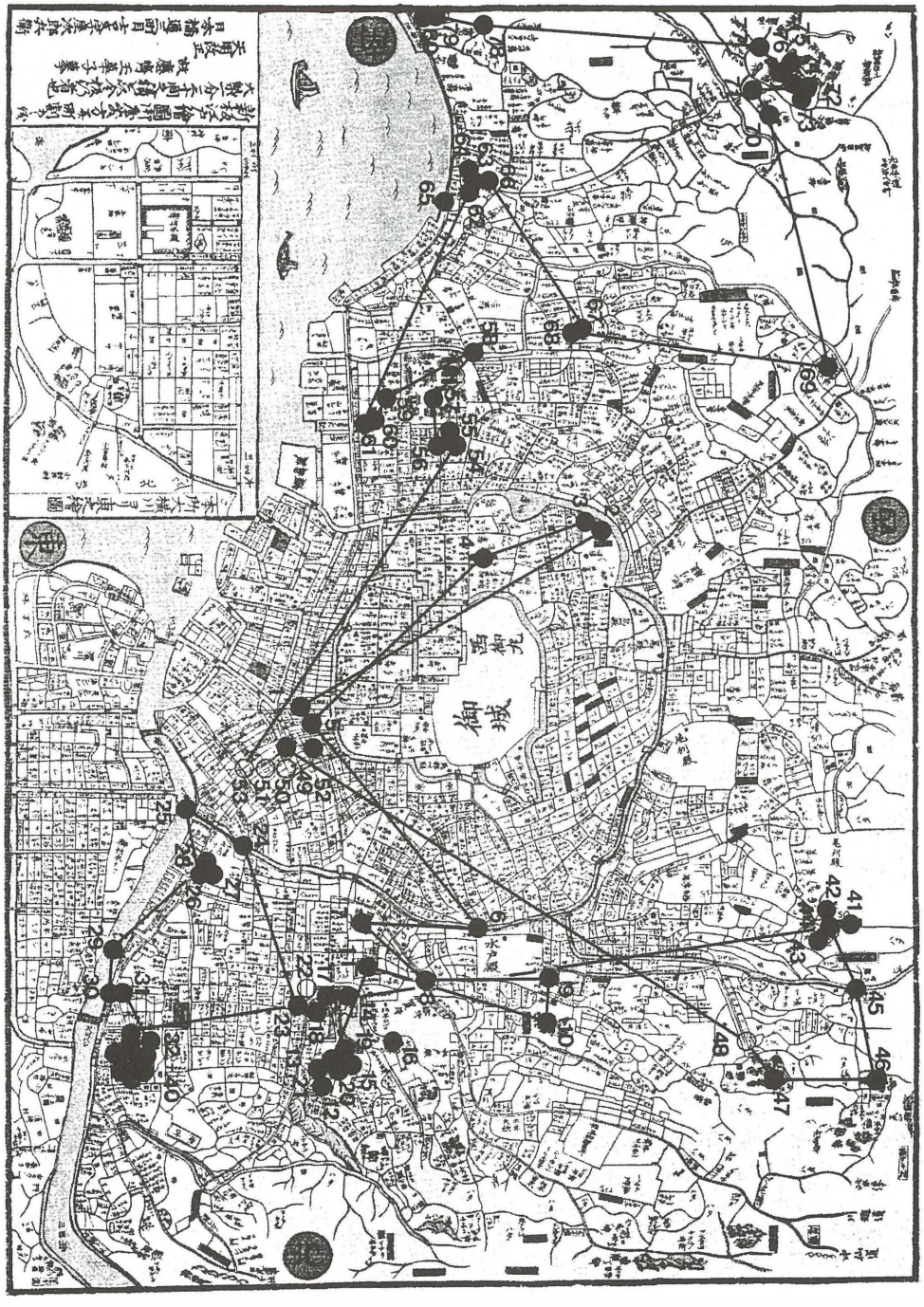

図17　「江戸循覧記」対象項目分布図

い社だから、歌に詠まれるナドコロだからという理由だけで筆頭をつとめているわけではない。

「日本橋」は江戸から地方へ出かけるスタート地点であり、逆に地方から江戸に物資や人が集まってくる結節点でもある。近くには市場や問屋が並ぶという場所性を考えると、最も江戸の賑わいや経済の繁栄を代表する場所である。いわば「町人の町」であり「流通」の町を象徴している。

次に「山王権現」としたのは将軍家の産土神としての格式を「神殿の粧ひ実に江都第一の大社」として表現していることで納得ができる。この場合「伝統と宗教的権威」を象徴している。

さらに三番目に「霞の関」をあげているのは、この地が古くからの名所であり、武都としてさらに政治の中枢として大名屋敷がいくつも存在するからである。都市江戸の「歴史と政治」を象徴的に示している場所である。

その後に「駿河町越後屋」を出すことで「東都第一の呉服屋」として江戸の「経済」を象徴する存在を示している。

このように都市としての江戸を最も象徴する対象をひと通り示した後、名所や景観の対象はおおよそ次のような空間的規則性をもって構成されていることに気が付く。すなわち、神田から本郷、小石川、湯島、上野という外堀りの外縁にあたる地域ブロックに展開され、これらが1冊目にまとめられている。その中心はやはり上野で、寛永寺の伽藍配置や建築様式に着目して多く描いている。2冊目には、上野山下から柳原、両国、浅草御蔵前、駒形、浅草の隅田川西岸流域ブロック、その後一転して高田、雑司が谷、護国寺と続く山の手台地のブロックに区分されるが、浅草では境内全図と境内の名所と楊枝店等の賑わいを多く描いている。3冊目には、日本橋大伝馬町に戻って十軒店等の賑わいを示しているが、芝愛宕、増上寺、赤羽、飯倉、高輪、麻布の芝・高縄の東海道沿いに足を延ばしたブロック配置で、さらに渋谷、目黒、品川といった城南の近郊地域に分布している。3冊目の中心はやはり芝周辺と目黒である。

これによってある程度の地域ブロックによる構成が想定されていたことが明らかであろう。また3冊の内容構成の上でも上野寛永寺および不忍池周辺で10項目、浅草寺関連で9項目、芝地域に関連するもので12項目、目黒関連で8項目があげられ、それぞれ挿し絵や関連項目の数によっても猿猴庵の注目度や関心の高さを知ることができる。同時にこれらは当時の江戸の名所として、魅力ある場所であったことがわかる。

ここで注意しなければならないのは、図17で示した項目の空間配置が猿猴庵の実際の行動軌跡として把握できるか否かである。地図上に示した直線は、対象地の配置構成の理解を容易にするために便宜的に行ったもので、猿猴庵自身の軌跡を示すものでも何でもない。文政11年に猿猴庵がこの『江戸循覧記』をまとめる際の草稿本は今のところ確認されてはおらず、日記のような記録性のあるものとの対照も可能性が薄い。したがってここでは行動の軌跡がどうであったかの結論は出せないのが実情である。

ではこれらの図に見られる配置は、他の地誌や名所案内にも見られるような典型的な構成配

置かというとそうとも言い切れない。例えば、18世紀に入ると名所案内や随筆などにも顕著に現れる隅田川以東の本所・深川地域や新宿・四谷・千住・王子など、江戸の周辺部や近郊については『江戸循覧記』ではほとんど触れられていないのが現状である。[44] このことは、猿猴庵の恣意的な操作や判断が『江戸循覧記』をまとめる際にあったことを感じさせる。

例えば、通常の江戸名所としてある程度の行政的な範囲[45]（御府内と称するいわゆる朱引き、あるいは江戸絵図の範囲）を意識して網羅するのであれば、前記したような傾向にはならずにもっと広範囲に及んでしかるべきであろう。しかし、猿猴庵が取り上げた範囲は、後世に墨引きされる町奉行支配の範囲内に相当するやに思われるが、『江戸循覧記』では新宿や本所・深川地域は対象にしていないので実際には墨引きよりも狭い範囲である。このように江戸の範囲や従来からの名所を無視した『江戸循覧記』の構成は、あえて全部を網羅しないといった猿猴庵の恣意的な意図が働いているか、あるいは猿猴庵自身が見た江戸の範囲の行動の軌跡を基本にまとめられたかどちらかの可能性を示唆していよう。

なぜ隅田川以東の本所・深川地域や城西の新宿・四谷、千住、王子方面に触れていないのだろうか。推測の許す限りこの点を考えてみると、猿猴庵が尾張藩士として藩邸がある四谷辺りを基盤に行動していたことを想定すると、新宿・四谷方面はあまりに身近な存在であるために記載しなかったとも考えられなくない。距離の問題とすれば、藩邸から雑司が谷方面は1里内の範囲である。上野・浅草・芝もほぼ同様に2里には至らない。隅田川以東の本所・深川も上屋敷から起算しても2里以上の距離になることはない。しかし、目黒・品川方面は2里を越えるにもかかわらず取り入れられている。単純に距離によって網羅したしないは当てはまらないようである。隅田川以東は対象には入れないが、目黒方面は取り上げるといった選択の違いは、そこに猿猴庵の意図する何らかの理由があるように思われるが、それを立証する材料はない。唯一、天明6年の水害によって隅田川護岸と橋梁に被害を受けたことが猿猴庵を隅田川東岸に出掛けていくことを妨げたか、情報入手に制約を受けたことが考えられなくはない。『武江年表』にも天明6年の水害記事の割注のなかで、「本所深川は家屋を流す。平井受地辺、水一丈三尺と云ふ。大川橋、両国橋危ふく、十六日往来留る。十七日昼、新大橋中の間四間流失。永代橋、二十間程流失。隅田堤三間程弐ヶ所押し切れ、男女江戸へ向け、両国橋を渡り逃げ来たり、浅草辺は船にて往来せり。」といった状況を記している。[46] これにより水害の被害は甚大で、猿猴庵が江戸の名所を紹介するには時期的に悪かったといえる。また実際に描く対象としてこれらの地が描写に耐えられなかったとも想像できる。

いずれにしても猿猴庵のこの変則的な江戸名所等の取り上げ方には疑問が多く、この問題を立証するのはむずかしい。ただし、対象地に関する詳細な情報を絵として残していることは、少なくとも実際にその地を見て描いたことの証拠になる。これらのことを考えると『江戸循覧記』は人に読ませる名所案内をめざしつつ、猿猴庵自身の江戸での行動に基づいてまとめられた内容であり、創作作品であると位置づけることが自然の理解であると考える。

猿猴庵の江戸における行動を把握しようとする際、対象地の平面的な配置構造によって随分秩序化されながらも合理的に理解しがたい部分がかなりある。猿猴庵のような江戸の外から来た人間の江戸に対する捉え方には、行政範囲や地理的範囲、さらには名所の分布範囲といった通常の平面的な空間認識とは異なる理解と意識、そして行動が存在していたと理解できよう。本書のタイトルが、『江戸名所案内記』ではなく『江戸循覧記』としているのは、猿猴庵自ら「巡覧」して歩いて情報を入手し、そして描いた作品そのものであったから名付けられたと理解したい。

⑵　立体的空間（パースペクティヴ）把握

猿猴庵の江戸に対する認識を、江戸のなかの場所性（トポス）と立体的な広がりや方向性、すなわちパースペクティヴ論として確認しておきたい。

18世紀後半になって名所図会と呼ばれる地誌のジャンルが空前の流行をもたらした。江戸でも『江戸名所図会』が30余年の歳月を費やして天保年間に２回に分けて出版されたが、その質・量ともに他の追随を許さなかった大作であった。なぜこれ程までに名所図会が全国各地で爆発的に流行したのかを考えると、やはり線遠近法を取り入れた俯瞰図の多用が基本的に指摘できる。しかもこれまでのような単なる景観描写による説明的な絵ではもはや人々のニーズに応えられず、詳細でしかも客観的な観察に基づく写実性の高さを求める志向が強い。絵を見ながらその場所に引き込まれるような遠近法の雰囲気や疑似体験は、さらに高い所から俯瞰するという視覚的な快楽を伴ってセンセーショナルな流行を産み出したと考えられる。遠近法を用いた俯瞰図による視覚的快楽とは具体的に一体何であろうか。一般的な解釈からすれば、ある高い位置から全体がつぶさにわかるといった非日常的な感覚と全体を見下ろす満足感や優越感である。こうした心性は円山応挙や司馬江漢の洋風画の技法である線遠近法の導入により徐々に共有化されていったことは周知の通りで、その後の浮絵や錦絵の発達形成に大きな影響を与えたことも事実である。[47)]

猿猴庵の遠近法の確立は比較的早い時期とされ、安永８年（1779）に24歳の猿猴庵が書き上げた「安永洪水図」ですでにその技法が使われている。ちょうど日本で本格的な名所図会になる『都名所図会』の刊行の前年にあたる。このことは名所図会の技法を模倣したのではなく、猿猴庵自身が別のところから学んだ技法として猿猴庵自身のオリジナルな技術力をもっと評価するべきであろう。

遠近法と俯瞰図の採用は、江戸を見る視覚＝パースペクティヴ論としてこれまでの名所案内を一変させた。これまでの物語的な名所記や文章中心の説明では、読むことの面白さや奇抜さ、興味を引く吸引力がいかに高いかが重要であったが、遠近法や俯瞰図の多用は現実の対象地をリアルに描写することでその認識に絶大な威力を発揮したことは間違いない。つまり遠近法や俯瞰図を用いた浮絵や錦絵、名所図会などは、名所景観や場所性の理解はもとより、対象その

ものを可視化したことで誰もが情報を共有できるという効力を最大限に引き上げたことにある。この効力は、近代写真によるよりリアルな表現方法と認識の仕方が登場するまで、圧倒的な力を誇っていたことはいうまでもない。

画誌＝絵本としての位置づけを主張した猿猴庵であったが、遠近法や俯瞰図をふんだんに取り入れた絵の表現は、対象を豊かな理解へと導くことに成功した。大惣が貸本として猿猴庵に制作を勧めた最大の意図がそこに含まれていたと理解できよう。そこで猿猴庵の『江戸循覧記』によって可視化された江戸の名所や対象が、どのように把握されていたか具体的に確認してみたい。

図18―1は、『江戸循覧記』における対象地の把握に関して都市地理学の都市構造理解の学説を基に作成した構造図である。基本的には都市は中心地帯・中間地帯・外縁地帯の3構造からなるが[48]、あえて近郊地帯をその外側に置くことにした。そこにさまざまな都市機能が働くのであるが、ここでは江戸の名所について当てはめてみた。

中心地帯＝歴史、由緒、伝統を重んじ、行政・事務の中心的官庁街、小売・卸売の問屋市場を有した商業経済の中心であり、交通の要衝拠点。

神田・山王・霞が関・越後屋・日本橋など

中間地帯＝個人的住宅が集中し、川・運河・道路等の交通の利便性が重要視され、港湾・倉庫・宗教的な施設の存在が目立つ。

お茶の水・浅草・上野・蔵前・芝・両国など

外縁地帯＝田園・自然の宝庫とされる一方、開発や拡大といった境界事項を含んで、中心地帯の機能を補う衛星都市的な地域が中心を取り巻くように成立する。

高田・品川・御殿山など

近郊地帯＝都市の消費物資を供給するヒンターランド。陸上・水上の両方で都市との結びつきが形成され経済的な圏構造が成立する。非都市的な空間との人的、文化的な交流も生じる。

『江戸循覧記』では取り上げられていない

具体的な場所を当ててみると、図18―2のように『江戸循覧記』に取り上げられた項目もまた江戸という都市の持つ雑多な性格、多種多様な機能が、都市江戸を構成する重要なトポスとして存在していることが窺い知れる。そこには中心と周縁といった空間軸の上に、歴史・政治・経済・交通・行事娯楽・生活風俗といったような都市機能が、寺社・屋敷・大店・日本橋・花見・盛り場といった象徴的な対象地にそれぞれ分化して存立していることになる。これらは俯瞰図による視覚情報によって比較的容易に全体把握が可能となり、さらに詳細な生活情報や風俗情報が視線を下げて描写されることで、立体的に都市を把握できることになる。『江戸循覧記』にみる江戸名所の把握は、実はこの圏構造と俯瞰と目線の関係による立体的な空間把握によって理解されていると考える。『江戸名所図会』に至っては、近郊地帯までに遠く及んでいるとこ

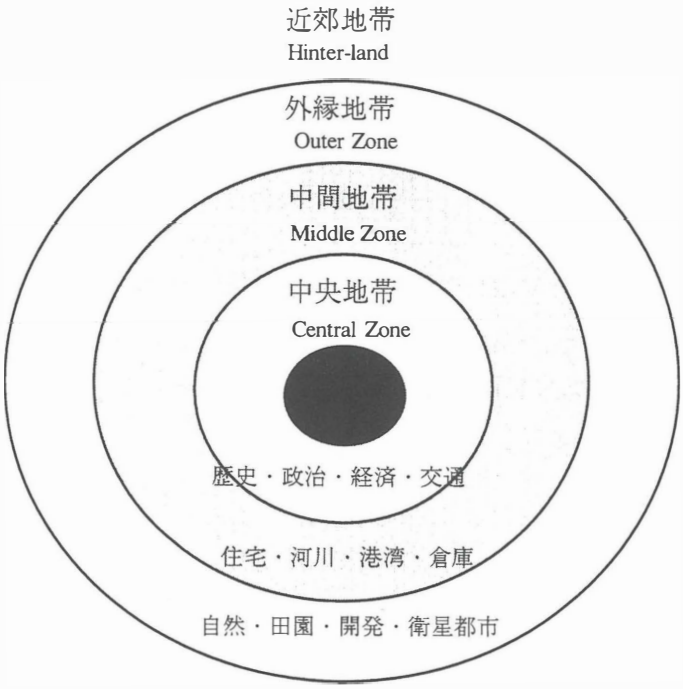

図18―1　江戸の地域認識構造概念図

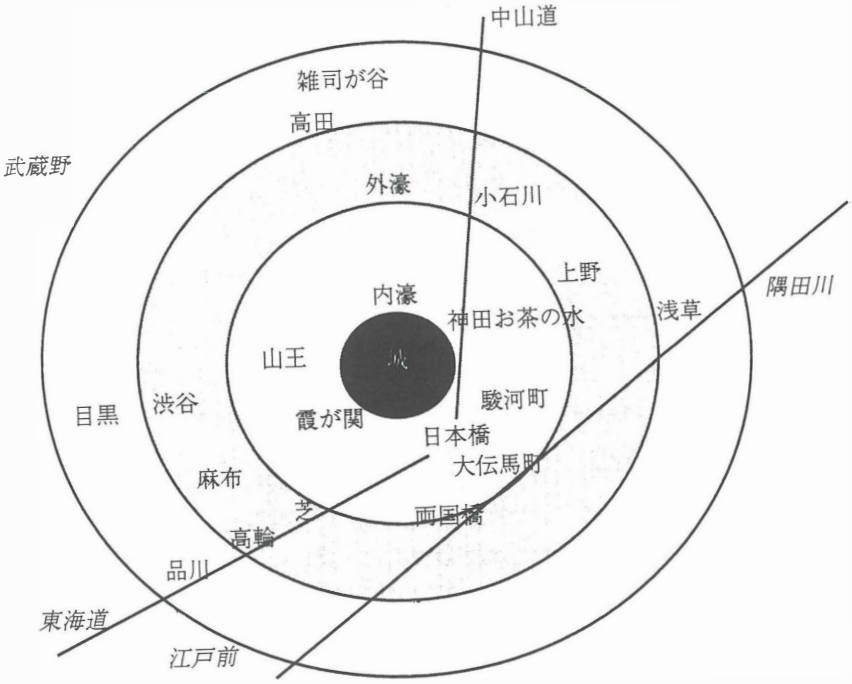

図18―2　江戸の地域認識構造具体図
Dickinson の三地帯論、Queeen & Thomas の大都市圏構造を参考に作成

ろに規模の違いと江戸の人々の交流の広さを示すものがある。この『江戸循覧記』が遠く近郊地帯まで及ばなかったのは、江戸以外の人という条件と天明期の江戸の都市的発達の限界として理解することで納得ができるのではないだろうか。

おわりに

猿猴庵の『江戸循覧記』を分析してきた。ここでいくつかの整理と解釈を提示したがここでの見解が必ずしも一般化されるものとは考えていない。あくまでもこれは解釈としてどのような結果が導きだされるのかを検討したものである。また猿猴庵が江戸で何をしていたのかはっきりしないことが多い。そのなかで、江戸の名所案内をまとめたこの『江戸循覧記』は、猿猴庵の江戸での行動を知る唯一の手掛かりであることは間違いない。猿猴庵が江戸をどのように認識し、把握していたのかを最後にまとめることにしたい。

『江戸循覧記』の特徴のひとつは「画誌」＝絵本と本人が記しているように、絵を用いた地誌である。「江戸物語」とはいうもののその体裁、記述構成は地誌としての特徴を見せており、系統的に配置され、網羅性をもった地誌ではないものの、その系譜上にあることは間違いない。作成にあたっては『江戸砂子』を参考にしており、記述内容にはきわめて似たものがある。しかしながら全く同じ内容を写しているわけではなく、自分の言葉で置き換え、自分自身が観察した内容を記述し、線遠近法を駆使して描いていることの価値は認める必要がある。

猿猴庵の江戸を見る視点としてまず明らかになったことは、「江戸第一」主義である。江戸でもっとも優れ、大きく、古く、美しいものが、この本に掲載された名所としての基準を明確に示している。確かに『江戸砂子』の影響もあり、焼き直しの感は捨てきれないが、自分の言葉と描写によって「何が第一」なのかを表現している。それが猿猴庵の最大の特徴であり独自性でもある。

それは「建築物」への着目によっても確認される。神社仏閣の建築様式や彫刻などへのこだわりは、他の地誌や名所案内には見られないオリジナルな傾向を示している。当時の江戸という都市を把握する上で、見上げるような塔や御堂の細かな細工まで猿猴庵が見落とさなかったのは、将軍の御膝元である江戸の繁華性や豪華絢爛な様をこの建築物の美観によってシンボリックに受け止めたからと解釈したい。このことは単に猿猴庵の私的な関心であったというだけではなく、江戸という場所を共通に認識する表象のひとつであったといえる。

さらに猿猴庵の独自な江戸認識は、目線で描く日常的な生活面に特徴がある。歴史や旧跡などの伝統や権威といった象徴性を記すばかりでなく、商いや店先でのやりとりの様子そのものや盛り場の狭い範囲の賑わいなどが細かく描写され、江戸の人々の日常的な営みまでを可視化している。江戸周辺を含めた地誌の集大成である『江戸名所図会』にも視線の低い描写はあるが、盛り場にしても日常的な生活実態の状況にしても、常に全体の景観や状況のなかで位置づ

けられた表現である。つまり、江戸のどこの景観なのかが明確に示された上で、人物描写や生活状況が示されているのである。『江戸循覧記』はもっとその中に入り込んで描写しているため、時々どの場所を描いたものかが不明になる。それが場所の特定ができない項目が数件あることの理由である。最初から生活や風俗の状況を示すことを表現しようとした手法である。そもそも『江戸名所図会』刊行の目的は、「他邦の人をして東都盛大の繁栄なる事を知らしめ」るためと凡例に記されており、江戸の町名主が江戸っ子としてのアイデンティティーを確認するために名所を素材に江戸の繁栄を誇示する文化的な営みの表れであった。[49] しかし、『江戸循覧記』が描く店先や盛り場風景はそれを誇示するものではない。猿猴庵の独自な視線と認識による江戸の表現は、『江戸循覧記』という貸本の作品を通して紹介されている。そこには歴史的な伝統や権力や荘厳さといった誰もが共有できる江戸認識のあり方がまず基盤にあることはいうまでもない。それに加えて猿猴庵独自の建築美や日常生活へのまなざしには、自ら江戸に生まれ育った人間の地域認識には無い価値観と心性メカニズムが存在する。それは俗に言う「おのぼりさん」意識、すなわち「驚愕」「珍しさ」に代弁できるであろう。

猿猴庵の江戸認識の表現方法として、江戸という都市の歴史や商売や建築物や生活や文化を鋭い観察力と素直な感性で受け止め、さらに自ら詳細に表現することで第三者にそのイメージや感性を共有化する方法をとっているところに猿猴庵の冷静な驚きと興奮が伝わってくるように思われる。

［註］

1）昭和28年（1953）に創立された愛媛近代史文庫が提唱する「地域社会史論」が、地域史研究の理論的先駆けとなる。ここでいう地域社会は地域住民主体によって身近な問題を解決していく研究と運動であった。その後、国家論に拡大されたが、イデオロギー的な枠組みから離れて、民衆視座に立つ社会史や日常生活史からの地域の捉え直しが進められている。また都市史において顕著な文化論や住民意識の問題、空間論の展開も活発化している。

2）こうした移行は、80年代からの社会史の隆盛に影響されるところが強い。自治体史の編纂でも地誌編が独立して刊行される傾向が目立つようになる。

3）石井修「幕末の地域結合と民衆」（『関東近世史研究』第22号、1987年９月）では幕末期の地域結合の様態とその歴史的意義について講集団と文化から検討し、在村文化のネットワークについて新たな地域史の論点を提示した。

4）白井哲哉「武蔵久良岐郡の『地誌御調書上帳』」（『神奈川県地域史研究』第７号、1988年）、「地誌調所編纂事業に関する基礎的研究」（『関東近世史研究』第27号、1990年）、「『地方史』認識の形成と近世地域社会」（『関東近世史研究』第34号、1993年）。

5）羽賀祥二「二つの史蹟碑――十九世紀前期の地域の歴史――」（『立命館文学』第521号、1991年）、「歴史的遺蹟と地域社会――賤ケ岳戦蹟と近江国余呉地域――」（『立命館史学』14号、1993年）、「「風土記」・「図会」の編纂と地域社会」（『関東近世史研究』第36号、1994年）。

6）岩橋清美「近世後期における歴史意識の形成過程――武蔵国多摩郡を中心として――」（『関東近世史研究』第34号、1993年）、「近世における地域の成立と地域史編纂」（『地方史研究』第263号、1996年）。

7）歴史科学としては一段低く見られてきた地誌に対して、最近の研究動向では次の視点から論究さ

れることが多い。一つ目は、地域編成のあり方や民衆統治の観点からの地誌の役割や歴史的再評価。二つ目は地誌編纂の対象となった地域住民の歴史認識のあり方の解明把握である。

8）拙稿「『江戸名所図会』から都市をみる」（『江戸東京博物館ニュース』第8号、1995年1月）と題する小文に「江戸名所を通じて江戸の歴史や生活文化の状況を把握するためには、名所絵を分析する方法と、名所の場所に視点をあてる方法がある。」と説いた。つまり、前者は描かれた内容や事柄を丹念に調べ、絵解きしていくものであり、名所絵の美術史的な系譜分析や風俗習慣の風俗史・民俗学的解釈が必要である。後者は名所のある場所を丹念に地図上に落とし、対象地の広がりや特徴を地理学的に理解するとともに、対象地へ出かけていく江戸の人々の行動を都市内交通の観点や都市空間論として位置づける必要があると考える。

9）名古屋の城下変遷や様相を記し、私的な事項はほとんどない。自筆本は天明4・5年、享和2年、文化8年、文政2年の5冊が残るが、残りは写本である。それは日記を公開するために自筆草稿本を整理したと推定されている。途中天明6年（1786）～寛政12年（1800）までが欠落している。多くは既に翻刻活字化され『名古屋叢書』、『日本庶民生活史料集成』、『日本都市生活資料集成』に一部収録されている。

10）人物像については、『名古屋市史』社寺編・学芸編・風俗編（1915年）、尾崎久弥「偉才猿猴庵種信」（『郷土文化』第4巻第1号、1949年）、織茂三郎・朝倉治彦「猿猴庵日記」（『日本庶民生活史料集成』9、1969年）に詳しい。そのうち『名古屋市史』学芸編には「種信外に出る毎に矢立と紙を懐にし、途次物を見れば徐歩し乍之を図して、画稿を作れりと、視力よく一町を隔てて高札の文字を読み、投影法によりて景色を描く」と猿猴庵の特徴を記している（372頁）。

11）長友千代治『近世貸本屋の研究』東京堂出版、1982年。安藤直太郎『貸本屋大惣の研究』安藤直太郎先生古稀記念出版後援会、1973年。朝倉治彦「貸本屋大惣」（『古通豆本』32号、1977年）。柴田光彦「大惣蔵書目録と研究」（『日本書誌学大系』27（1）、青裳堂書店、1983年）、広庭基介「京大『大惣本』購入事情の考察」（『大学図書館研究』第24号、1984年）ほか多数の研究がある。

12）名古屋市博物館部門展図録『猿猴庵とその時代――尾張藩士の描いた名古屋――』、名古屋市博物館、1986年11月。

13）「藩士名寄」かノ一、名古屋市蓬左文庫所蔵。

14）猿猴庵の没年月日は、「天保二年七月二日」（慶応3年「尾張墓所集覧」）、「七月三日」（「高力種信墓銘」）、「七月十二日」（「藩士名寄」）と異なる記述があるが、三日死亡、十二日届け出と名古屋市博物館では想定している。

15）児玉幸多監修、宮本勉解説『東街便覧図略』伊豆・駿河・遠江の部、羽衣出版、1994年。名古屋市博本には詞書が付くが、国会本には詞書はない。

16）後述する黄表紙『きつひむだ枕春の目覚』（『名古屋叢書』第十四巻、文学編（一）、名古屋市教育委員会、1961年）の解説には、「天明六年十月、藩侯の供をして、江戸から名古屋へ帰る、その道中の採録」と説明してあるが、実際には名古屋から江戸へ向かったのが正しい。

17）『徳川実紀』第十篇、772頁。

18）「御日記頭書五」（『名古屋叢書』第五巻、記録編（二）、名古屋市教育委員会、1962年）112頁。

19）前掲註17）、798頁。

20）前掲註18）、113頁。

21）前掲註17）、810頁。

22）前掲『東街便覧図略』総解説、羽衣出版、1994年、89頁。

23）前掲註16）、153頁。

24）前掲註16）、154頁。

25）前掲註16）、159頁。

26）『江戸循覧記』「日本橋」。

27）七巻二十冊におよぶ『江戸名所図会』の巻一は江戸の中心部に始まり、以下江戸の周辺から近郊

を含む範囲を南から右回りでブロックを構成している。具体的には巻二は品川から金沢・六浦、巻三は桜田から目黒・世田谷・府中・高幡、巻四は市ケ谷から目白・雑司が谷・板橋・練馬・所沢・大宮、巻五は湯島から根津・駒込・王子・豊島、巻六は浅草から隅田川西岸、巻七は本所・深川・松戸・行徳・船橋と分布している。凡例には「凡神社仏閣の幅員方域を図するは、専ら当今の形成を模写す。且地図の間に四時遊観の形勢を絵がくに、其態度、風俗、服飾、容儀、是亦当今の形容を図す。」と明確にその姿勢を記して地誌としてのスタイルを明記している。

28) 江戸時代初期は、仮名草子に属する名所案内や名所巡覧記が多く出された。登場人物による解説と紹介が物語的な展開で示されることが特徴である。その後、元禄あたりから地誌としての体裁や絵入り名所案内が作成され、合理的で実用的なものが多く登場するようになる。

29) 拙稿「名所記にみる江戸周辺寺社への関心と参詣」(地方史研究協議会編『都市周辺の地方史』雄山閣出版、1990年) 108～126頁。

30) 『江戸循覧記』「東海寺万年石」。

31) 前掲註12) の図録では「主にその後半生に、大惣の依頼で絵入本を著わした」としている。その内はっきりわかっているのは『懐中硯』(文化9年、国立国会図書館所蔵)、『矢立墨』(文政2年、国立国会図書館所蔵)、『桜見に春の日置』(文政5・7年、財団法人東洋文庫所蔵) で、猿猴庵の没後に大惣に入った本も多いので注意が必要であると指摘している。

32) 前掲註12)、14頁。

33) 金子光晴校訂『増訂武江年表』東洋文庫、平凡社、1978年、204頁。

34) 同上、205頁。

35) 同上、179頁。

36) 『浅草寺日記』第七巻、浅草寺、1983年、750～754頁のあとがきに詳しい解説あり。

37) 『江戸砂子』六巻六冊は、内題では「江戸砂子温故名跡誌」とあり、菊岡沾凉が自筆版下、自筆挿し絵を手掛けて享保17年 (1732) 江戸万屋清兵衛から刊行された。内容構成は典型的な江戸の地域空間別ブロック編成。

38) 『続江戸砂子』五巻五冊は、内題では「続江戸温故名跡誌」とあり、『江戸砂子』同様菊岡沾凉が著わし、享保20年 (1735) 万屋清兵衛の刊行である。内容構成は名産・物資の類の編纂である。

39) 『再校江戸砂子』六巻八冊は、内題では「再校江戸砂子温故名蹟誌」とあり、亘足軒が再校、冬渉が訂正し、明和9年 (1772) 藤木久市版で刊行された。

40) 天保5年 (1834)・同7年 (1836) に須原屋から出版された『江戸名所図会』は、神田雉子町をはじめ他5町の町名主を代々つとめる斎藤幸雄、幸孝、そして月岑こと幸成ら親子40年にわたる調査研究によってまとめられたものである。その様子は『武江年表』に「この書は寛政中祖父長秋居士の遺稿、先孝県麻呂の校訂にして、郊外に及ぼせるは大かた県麻呂の編輯なり」とある。

41) 喜田川季荘『守貞漫稿』後集巻之二、雑劇の項には「江戸ニテハ、ヤバト云。(中略) 江戸ハ浅草寺奥山、日本橋四日市、両国橋西、愛宕山、神田明神、湯島菅廟、芝神明宮、皆是ヲ矢場ト云。」とある (朝倉治彦・柏川修一編、東京堂出版、1992年、104～105頁)。

42) 菱川師宣は寛文・延宝～元禄期にかけて作画活動を展開する。絵入本などは、当然絵を中心に展開しながらも絵を説明する文章は画面上部に横線で区分した枠内に添えられており、絵と文章は分離独立している。

43) 『江戸鹿子』六巻、藤田理兵衛著、貞享4年(『東京市史稿』産業篇、第七所収、1960年、1162～1420頁)。

44) 拙稿「近世後期における江戸名所めぐりの諸相」(『交通史研究』第35号、1995年) では、江戸を訪れた人々の社寺参詣や名所めぐりの行動分析を通じて、「江戸めぐり」の具体的様相を明らかにしようとした。そのなかでいくつかのパターンが見られ、浅草・両国などの盛り場や典型的な名所・寺社を押さえるものと、江戸の周縁・近郊地域を周遊するパターンの二種類である。

45) 江戸の市域内を「御府内」と称するが、その範囲の明確な線引きはあいまいであった。明和2年

（1765）に「四里四方」が示され、天明８年の江戸払いの範囲も「品川、板橋、千住、本所・深川・四ツ谷ノ外」を含み、寛政３年（1791）には江戸城曲輪内のおおよそ四里程度の範囲が網羅されている。いわゆる朱引きと称される境界線は、文政元年12月に老中から示される。寺社の勧化場、札掛場がその範囲で、おおよそ従来の寺社奉行所支配の範囲である。別に町奉行所支配の墨引き内の範囲も示された。また、江戸十里四方や五里四方の区分もある。

46）前掲註33）217～218頁。

47）李孝徳は『表象空間の近代』（新曜社、1996年、47頁）で、「日本における風景画は、外国からの浮絵の輸入によって始まり、のぞき眼鏡と眼鏡絵を経ることで一応の確立を見たと先に述べた。つまりここから言えることは、「風景」は線遠近法の導入によって発見された」と指摘する。

48）山鹿誠次『新訂都市地理学』大明堂、1981年、67～72頁。

49）拙稿「斎藤月岑の江戸認識――著作刊行物の性格分析を通して――」（『立正大学大学院年報』第５号、1987年）

［参考文献］

勝原文夫『農の美学――日本風景論序説――』評論社、1979年

クリフォード・ギアツ「第一章　厚い記述――文化の解釈学的理論をめざして――」（『文化の解釈学』Ⅰ、吉田禎吾他訳、岩波現代選書118、岩波書店、1987年）

今田洋三『江戸の本屋さん』ＮＨＫブックス299、日本放送出版協会、1977年

園田英弘、『「みやこ」という宇宙』都会・郊外・田舎、NHKブックス696、日本放送出版協会、1994年

竹岡敬温『「アナール」学派と社会史』――「新しい歴史」へ向かって――、同文舘出版、1990年

武田恒夫『日本絵画と歳時』ぺりかん社、1990年

服部幸雄・高山宏「対談江戸トポス学事始」（『国文学』解釈と教材の研究、第35巻９号、1990年８月号）

ピエール・ブルデュー「アイデンティティと表象」（『actes』NO, 4、特集「現代空間論」、日本エディタースクール出版部、1988年）

ヘンリー・スミス編『浮世絵にみる江戸名所ランドスケープ』ビジュアルブック江戸東京２、岩波書店、1993年

前田愛『都市空間のなかの文学』筑摩書房、1993年

村武精一『祭祀空間の構造』――社会人類学ノート――、東京大学出版会、1984年

山岸健『風景とはなにか』都市・人間・日常的世界、ＮＨＫブックス673、日本放送出版協会、1993年

［付記］　本稿は当館都市歴史研究室在籍中、平成６・７年度の一般研究として「江戸名所絵にみる生活風俗と象徴表現に関する研究」と題するテーマで取り組んだ研究の一部である。都市歴史研究室主催の研究会、また平成８（1996）年10月12日の第38回近現代史研究会では「尾張藩士猿猴庵の江戸認識」と題する研究発表の場を得、多数の御意見を賜りましたこと、ここに記して感謝申し上げます。

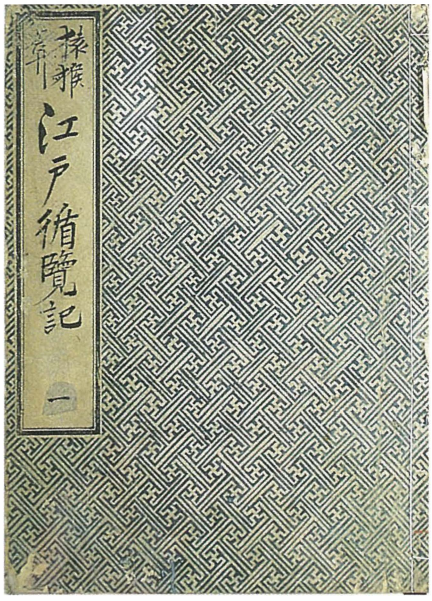

図 1　「江戸循覧記」表紙
財団法人東洋文庫所蔵（以下、同）

図 2　「江戸循覧記」日本橋

図 3　「江戸循覧記」不忍池・忍の岡・向ひの岡

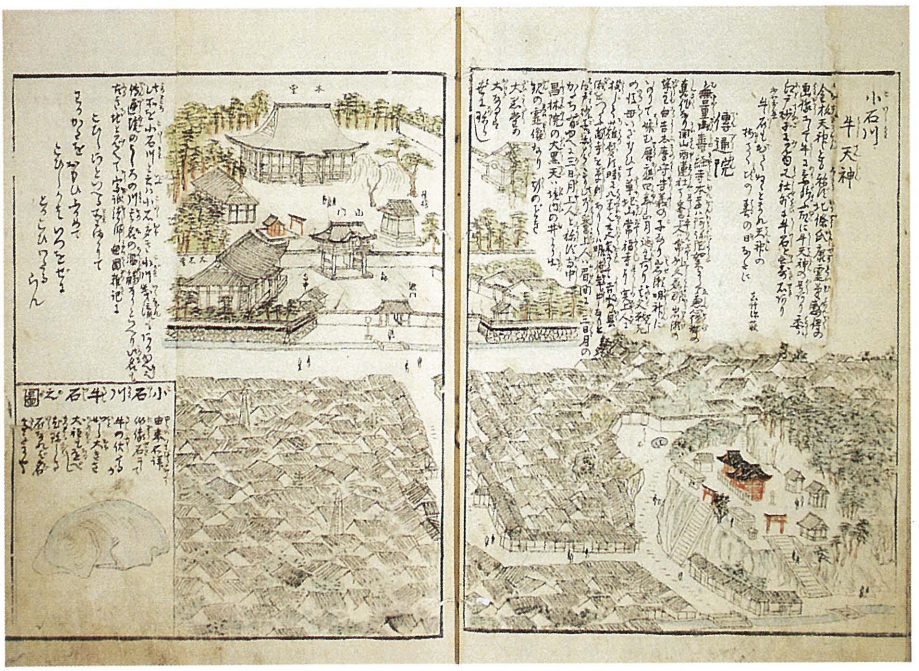

図 4　『江戸循覧記』小石川牛天神・伝通院

図 5　『江戸循覧記』東海寺万年石・付録

図 6　『江戸循覧記』浅草楊枝店

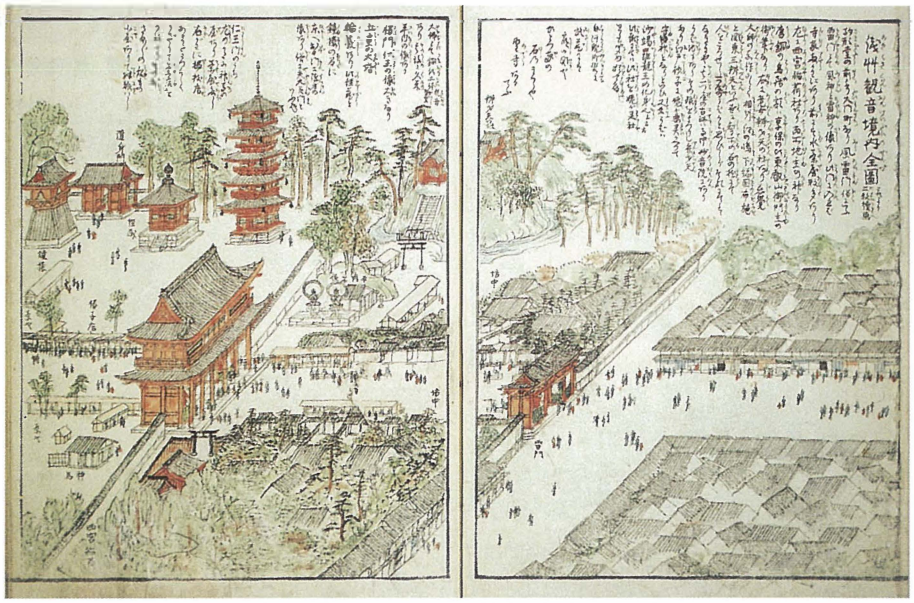

図 7　『江戸循覧記』浅草寺観音境内全図

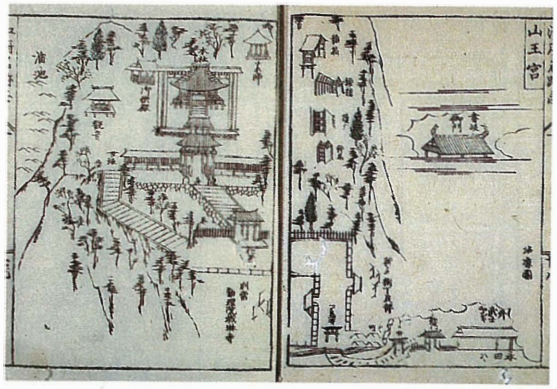

図８－１　『江戸砂子』山王宮
館蔵（資料番号83200334）

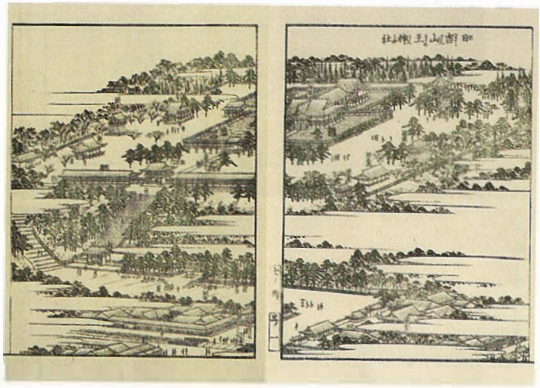

図８－２　『江戸名所図会』日吉山王神社　館蔵（資料番号91211460）

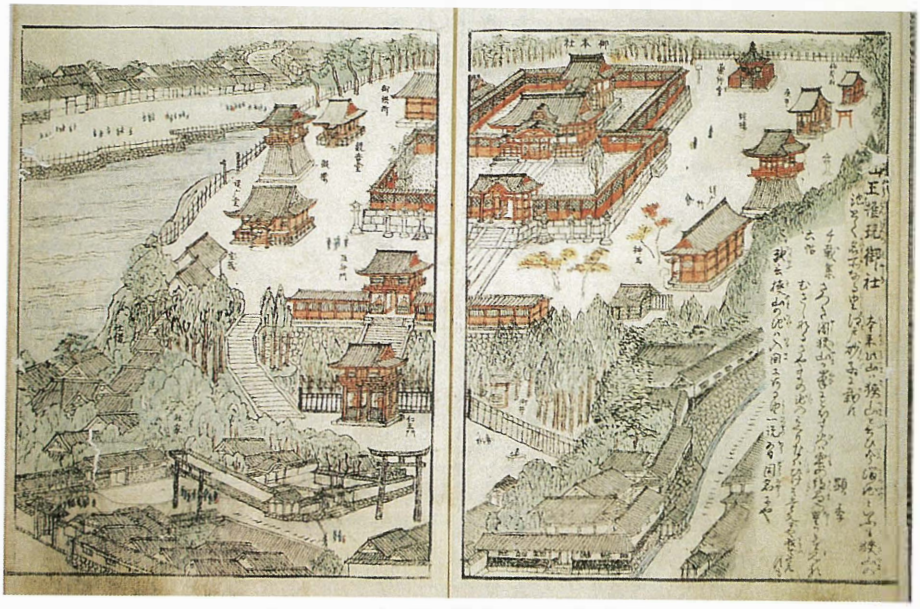

図８－３　『江戸循覧記』山王権現御社

図９―１　『江戸循覧記』駿河町越後屋

図９―２　『江戸名所図会』駿河町三井呉服店
館蔵（資料番号9121454）

図９―３　歌川広重／画
「名所江戸百景　するがてふ」
館蔵（資料番号8320008）

図10　『江戸循覧記』上の雲水塔

図11　『江戸循覧記』上野山下

図12　『江戸循覧記』煮売茶屋

図13　『江戸循覧記』揚弓

図14　『江戸循覧記』古道具屋店先

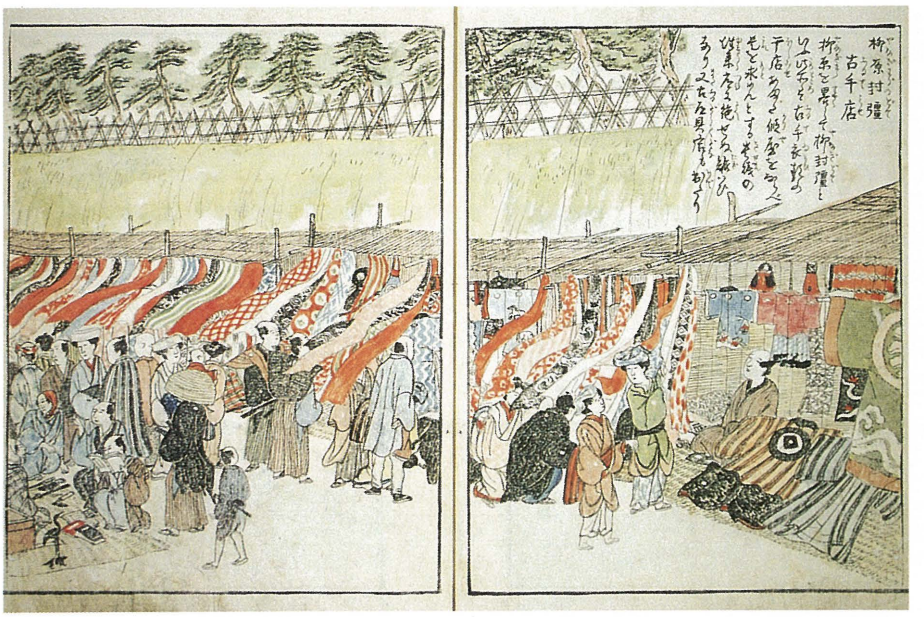

図15　『江戸循覧記』柳原封彊古手店

図16　『江戸循覧記』芝三嶋町